

戦国期武家の日常使いの貿易陶磁の実像 十五世紀中葉～十六世紀中葉を中心に

A Realistic Portrait Concerning the Daily Use of Trade Ceramics by Samurai Families in the Warring States Period
with a Focus on the Mid-15th to Mid-16th Centuries
MIZUSAWA Kouichi

はじめに

- ① 十五世紀前半の貿易陶磁器様相
- ② 諏訪問興・行寺遺跡炭化物層出土遺物再論

- ③ 各地の十五世紀中葉～十六世紀中葉の貿易陶磁様相
 - ④ 十五世紀中葉～十六世紀中葉の貿易陶磁器の実像
- おわりに

【論文要旨】

本稿では、戦国期城館の実年代を探索するための考古学的手段として、貿易陶磁器の中でも最もサイクルの早い食膳具を中心に十五世紀中葉～十六世紀中葉の出土様相を検討し、遺跡ごとの組成を明らかにした。

まず、十五世紀前半に終焉をむかえる三遺跡をとりあげ、非常に器種が限られていたことを確認し、次いで十五世紀第三四半期の基準資料である福井県諏訪問興行寺遺跡の検討を行った。そして兵庫県宮内堀脇遺跡や京都臨川寺跡、山科本願寺跡、千葉県真里谷城跡、新潟県至徳寺遺跡等十二例と前稿で取り上げた愛媛県見近島城跡、福井県一乗谷朝倉氏遺跡などを加え、当該期の貿易陶磁比の変遷を示した。

その結果、十五世紀代は青磁が圧倒的比率を占めており、十五世紀中葉の青花磁の出現期から十六世紀第一四半期までの定着期は、一部の高級品が政治的最上位階層に保有されたものの貿易陶磁器の主流となるほどの流入量には達せず、日本社会にその

存在を認知させる段階に留まったと考えられる。

そして青花磁が量的に広く日本社会に浸透するには十六世紀中葉をまたねばならなかったが、その時期は白磁皿がより多くを占めることから、青花磁が貿易陶磁の中で主体を占める時期は一五七〇年代以降の天正年間以降にずれ込むことを明らかにできた。

器種としては、十六世紀以降白磁、青花磁皿が圧倒的であり、碗は青磁から青花磁へと移るが、主体的には漆器碗が用いられていたと考えられる。

なお、食膳具以外の高級品についても検討した結果、多くの製品は伝世というほどの保有期間がなく、中国で生産されたものがストリートに入ってきていたことを想定した。

【キーワード】 武家、貿易陶磁器、奢侈品、山科本願寺、青磁、青花

はじめに―杉山城問題について

武蔵比企の城、杉山城はその技巧的な縄張りから後北条の築城技術の粋を集めた山城だと評価されてきた。

しかし発掘調査の結果、出土遺物からみる限り瀬戸美濃大窯1段階初頭を下限とする城であることが判明した〔嵐山町教委二〇五二〇〇八〕。

すなわち、地表面の観察と出土遺物の年代観が約半世紀ずれていることになり、大論争を巻き起こした。二〇〇五年にシンポジウム埼玉の戦国時代「検証 比企の城」〔史跡を活用した体験と学習の拠点形成事業実行委員会編二〇〇五、埼玉県立歴史資料館編二〇〇五、歴史資料館展示・史跡整備担当編二〇〇五〕、二〇〇八年にシンポジウム「戦国の城と年代観―縄張研究と考古学の方法論」〔帝京大学山梨文化財研究所編二〇〇八、峰岸・萩原編二〇〇九〕、二〇一〇年に中世を歩く会シンポジウム「城館の年代観」〔中世を歩く会二〇一〇〕と立て続けに大規模なシンポジウムが開催された。

本来、現表の城郭遺構をして編年を組めばいいのであるが、一世を風靡した千田嘉博氏による織豊系城郭の虎口編年に先立つ先進的な虎口の存在及びまさに杉山城を図示して説かれた求心型城郭プランの年代観〔千田二〇〇〇〕が崩壊した現在、規模の大小以外に指標を見出し難いように思われる。^①

そこで本稿では、城館の年代を定めるための考古学的前提として戦国期武家の十五世紀中葉―十六世紀中葉における日常使いの貿易陶磁器の様相を明らかにし、今後の研究に資することを目的とする。ただし、同じ支配階層に属すると考えられる寺家の遺跡も必要に応じて検討を加える。

なお、以前本時期の貿易陶磁器について私見を述べたことがあったが〔水澤二〇〇九a、以下前稿とする〕、数例を検討するにとどまったため、各

地の出土例からその可否を改めて問うこととしたい。^②

①十五世紀前半の貿易陶磁器様相

貿易陶磁器は、日本での鎌倉末期―南北朝期の動乱、中国での元末明初の動乱及び明朝の海禁政策がいまって、鎌倉北条家滅亡の一三三三年前後から一四二九年の中山王朝による琉球統一にかけての期間、輸用量が非常に少なくなっていたと考えられる。ここでは、本題に入る前の十五世紀前半の様相を簡単にみておきたい。

(一) 鎌倉建長寺

史跡建長寺境内の発掘調査では、応永二十一年（一四一四）の火災に伴う遺物が大量に出土している。火災処理に伴って池に投げ入れられた遺物を見ると、数百点に及ぶ高級な皆朱漆器の多量のセットや天目茶碗形及び天目台の黒色系漆器、複数の瓦器風炉、多量の土器等が認められるのに対し、貿易陶磁器は天目茶碗や青磁大香炉・花瓶、褐釉壺、緑釉器台等の建長寺にふさわしい、しかし一点豪華主義的な器物が認められるのみで、通常の青磁碗等は数点が破片で出土したにすぎない〔博通ほか編二〇〇三〕。

(二) 会津新宮城跡

次いで、会津喜多方市の新宮城跡をみていく。新宮氏は、蘆名氏によつて最終的に永享五年（一四三七）に滅ぼされているが、応永十年（一四〇三）―応永二十七年（一四二〇）にかけて落城記事が認められるため、城の機能は概ね十五世紀第1四半期で終焉を迎えたものと考えられる〔西ヶ谷二〇〇四、山中二〇〇七二〇二、喜多方市教委二〇〇八〕。館としての上限は、新宮氏が康応二年（一三九〇）に館に近接する新宮熊野

社へ鰐口を寄進していること等から、十四世紀後半には、現在の場所に館を構えたものと考えられよう。

館の存続時期の主郭からは、高麗青磁や瓦質風炉、多量の土器等が出土しており、文献から知られるとおり国人領主新宮氏の館跡と考えられる。そして、十四世紀後半以降の貿易陶磁器は、調査面積約二八〇平方メートル⁽³⁾に対し、白磁三点、青磁碗二十点ほどである。調査面積が少ないため明確ではないが、この量は十三湊遺跡の平均よりやや低い⁽⁴⁾が、近似する数値である〔水澤二〇〇九、第一部第二章第二節〕。もちろん同時期の越後堀越館や津軽十三湊遺跡の屋敷部分〔市浦村教委二〇〇〕よりは、かなり低いが、国産陶器の主体が珠洲陶であることから考えて、日本海側からの搬入により一定の貿易陶磁器が確保されていたといえよう。

ただし、種類は白磁がビロースク端反碗・八角坏・内湾皿、青磁が端反碗・篋描蓮弁紋碗・盤・香炉・器台であり、青磁碗のバリエーションが非常に少ない⁽⁴⁾。このことは、十五世紀中葉以降の青磁碗の多様性と比較して、大きな違いである。

(三) 越後堀越館跡

最後に、右にもふれた越後堀越館を取り上げる〔新潟県教委二〇〕。ここでは、応永三十年（一四二三）の堀越要害落城後の火事場整理土坑であるSX三四出土遺物をみていこう。報告書七十三頁の一覧表によれば、貿易陶磁食膳具は、白磁碗三点・皿二十九点、青磁碗十七点・皿九点・盤五点・香炉二点、天目茶碗十一点が出土している。実見の結果、白磁碗は鎌倉後期主体の口禿碗二点とビロースク端反碗一点、白磁皿は高台無扶りの内湾皿がほとんどを占め、腰折皿が一点、内湾小坏が一点である。青磁碗は、鎌倉前期の幅広蓮弁紋碗一点、鎌倉後期主体の細鎚蓮弁紋碗二点・皿類三点、端反碗十点、端反+蓮弁紋碗一点、⁽⁵⁾青磁皿はすべて端反皿である。

これらのうち、白磁口禿碗二点と青磁幅広蓮弁紋碗一点・細鎚蓮弁紋碗二点・皿類三点の八点は、廃棄時からみて一世紀以上前の将来品である。それらのいわば古物が碗の四割を占めていることをどのように考えればよいであろうか。一点二点であれば紛れ込みの可能性もあろうが、この場合は十五世紀第一四半期にも鎌倉期の遺物、それも食膳具が武家の器物として舶載天目茶碗などともに保有されていたと考えざるをえない⁽⁶⁾。元代の質のよい青磁が明初の商品のわるい青磁より重宝がられたのは当然であろうし、それが完全に切り替わるには十五世紀中葉の厚釉青磁をまたねばならなかったといえようか。

(四) 小結

以上、十四世紀末から十五世紀初頭にかけての貿易陶磁食膳具についてみてきた。その結果、碗については青磁薄釉端反碗が主体で、少量の白磁ビロースク端反碗が伴うことが判明した。そしてこの時期は、貿易陶磁器の数量が限られていたため、鎌倉期の貿易陶磁食膳具までが十五世紀初頭の武家居館で大切に保管されていた様子が観取された。

② 諏訪間興行寺遺跡炭化物層出土遺物再論

福井県の諏訪間興行寺遺跡については、第二面の炭層出土遺物が注目され、十五世紀前半の基準資料として言及されてきた。筆者はその資料群について、共伴したとされた瀬戸・美濃等に基づき、十五世紀第三四半期で首里城京の内SK〇一出土遺物の一四五九年以後に焼失した遺物群と位置付けた〔水澤二〇四〕。

しかるに、調査後二十年近くたって刊行された待望久しい報告書〔福井県埋文二〇八〕の第三期（これまでの二面）の説明によれば、「IⅠHⅠ6Ⅰ7区付近の炭化物層の遺物は、整地土内炭化物層やSB三二三

第1表 諏訪問興行寺遺跡貿易陶磁 (15世紀) 一覧 (破片数)

青磁碗	無紋端反 (D2)	117	白磁碗		51
	直縁無紋 (E)	80	白磁皿	内湾小皿	243
	雷紋帯 (C2)	169		端反非 E 群 2 個体	21
	幅広蓮弁紋 (B2)	115		大皿	27
	筋描蓮弁紋 (B3)	22	白磁小坏	端反	24
	線描蓮弁紋 (B4)	31		八角坏	128
	不明	82	白磁合計		494
青磁皿	端反	57	青花碗		35
	内湾	38			
	不明	5	舶載天目		28
青磁盤		180	舶載茶入		15
青磁香炉		59	褐釉四耳壺	1 個体	104
青磁その他		27			
青磁合計		982	貿易陶磁器総計		1658

付近のそれに比べ若干時期差（やや新しい傾向）があるように見え、区画も S B 三三などの向きと異なることなどから、火災が二度発生した可能性も考える必要が出てきた」〔富山二〇〇八、二四頁〕という記述がなされ、これではこれまでの一括資料という位置付けさえ危うくなることになる。そこでその記述内容を確認するべく遺物観察表を探したが、

報告書中に陶磁器の観察表が付載されておらず、検証不能であった。

そこでようやく機会を得て、二〇一〇年十月二十一日に福井県埋蔵文化財調査センター城東収蔵庫で遺物を実見することができたため、以下に概要を報告する。

十五世紀代の貿易陶磁器としては、青磁九八二点（破片数、以下同じ）、白磁四九四点、青花磁三十五点、舶載天目・茶入四十三点、褐釉四耳壺一〇四点（一個体）の一六五八点をカウントした（第1表）。以下に種別ごとにみていく。

（一）青磁

碗の中で最も雷紋帯碗が多い。次いで、無紋端反碗・幅広篋書蓮弁紋碗がほぼ同数で、無紋直縁碗が続く。これらに後続する筋描・線描蓮弁紋碗は、両者を合わせてもわずかに五十片を超える程度しかない。この内、最も多い雷紋帯碗の第三期炭化物層出土品（八十一頁）として図示されているものの中で、人形手の1と4の二個体は、炭層の注記が認められない（後述）。なお、稜花皿は、まったく出土していない。

（二）白磁

内湾皿は、最も新しい全面施釉までが炭層から出ている。大振りの端反皿二点、無扶高台の内湾皿口径十二・九・八センチ、扶高台皿が九・四・九・七センチ、全面施釉が九・二・九・四センチと口径が縮小している。また、あまりみない端反小坏と相同形の碗が火災層から五個体以上出土している。

そして、大振りの皿が四個体以上出土しており、少なくとも一点は口径三十センチほどにもなる（火災後の搬入）。端反皿 E 群の出土は認められなかった。

(三) 青花磁

Ⅲ期炭層に含まれるものがわずかに二個体、最終面分を合わせても十個体を越えることはなく、皿はあつても一点である。炭層出土の二個体は、ともにH6グリッドからの出土である。

(四) 瀬戸・美濃

後Ⅳ期古段階～大窯2段階までの天目茶碗が出土しているが、それ以外の器種のほとんどが後Ⅳ期の所産であり、特に新段階のものが多く(天目茶碗も同様であるが、報告書には一点のみ注記のない個体が図示されているにすぎない)。なお器種的にも偏りがあり、梅瓶・口広有耳壺・小型水注が各一個体、卸目付大皿・卸皿各五個体、天目十個体ほどとなる。

(五) その他

漆塗り天目の底部が出土している。外面に釉垂が表現されており、胎土から瓦質製品である可能性が高い。

(六) 層位的関係

すべての遺物の注記をチェックする時間はなかったが、第Ⅲ期炭化物層出土遺物について記す。

第1図上四段の遺物は、「炭下」の注記が認められるものである。これが炭層内の下層にあたるのか、炭層よりも下の層であるのかは不明であるが、次の炭層よりは若干古相を呈するように思われる。青磁端反無紋碗・端反劃花碗・篋描蓮弁紋碗・雷紋帶碗・篋描蓮弁紋皿等、白磁端反皿(非E群)・内湾皿・八角坏、舶載天目・茶入、古Ⅳ期新を下限とする瀬戸・美濃等からなる。

第1図中四段の遺物は、「炭」「焼土」の注記が認められるものである。

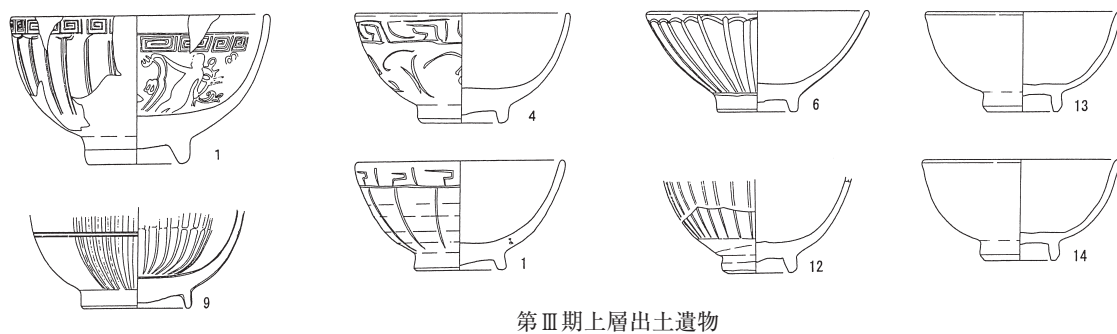
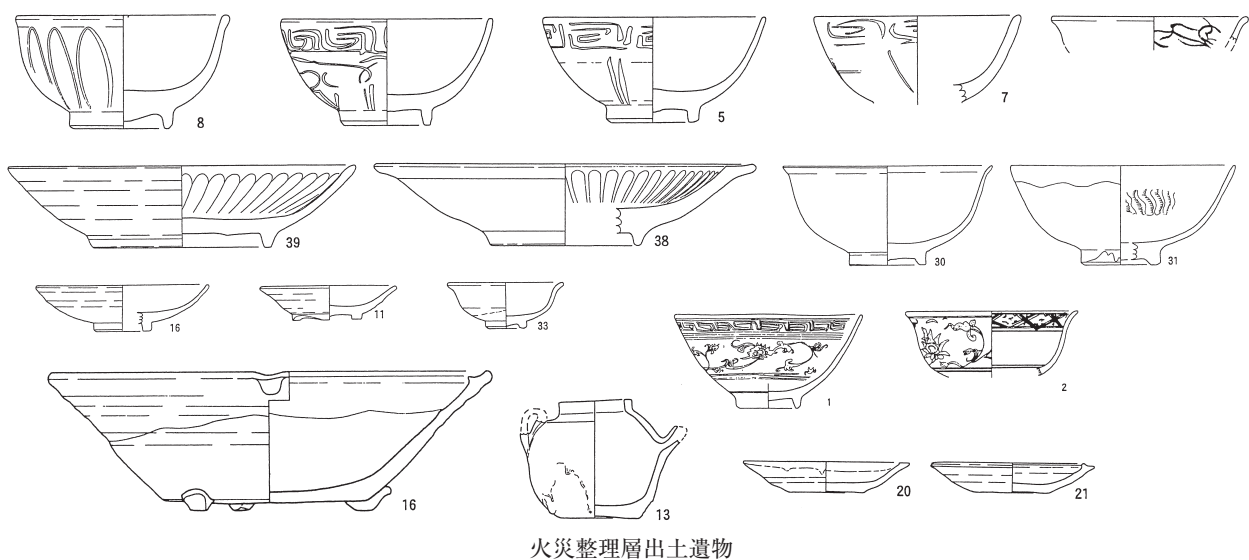
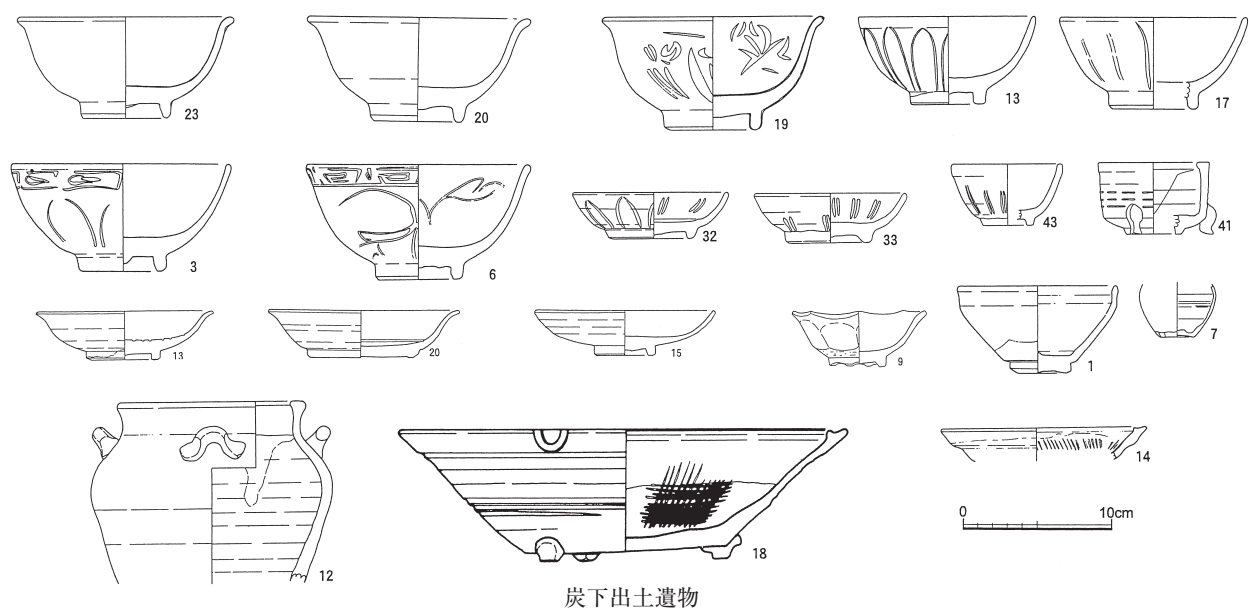
青磁篋描蓮弁紋碗・雷紋帶碗・端反劃花碗・盤等、白磁端反碗・直縁碗・内湾皿(全面施釉を含む)・端反坏、青花磁直縁碗・端反碗、古Ⅳ期新を下限とする瀬戸・美濃等からなる。

第1図下二段の青磁碗は、「炭」「焼土」の注記が認められないものである。青磁雷紋帶碗(人形手含む)・筋描蓮弁紋碗・直縁無紋碗等からなる。火災以前と以後では、明らかに青磁碗に時期差が認められるが、問題は「炭下」と「炭」「焼土」遺物群との時期差である。「炭下」に青磁端反碗が目立ち、白磁皿に古相が認められることから、それらは「炭」「焼土」層出土の遺物よりも古手の遺物群であることがいえよう。しかしながら、瀬戸・美濃の盤はともに後Ⅳ期新段階の製品であり、微妙に時期差を有するとはいえず、廃棄時期の差はほとんど認められない。したがって、「炭下」と「炭」「焼土」遺物群は、火災後においても白磁端反皿E群及び青磁稜花皿が出土していないことから、実年代でいえば一四五〇年前後から七十年代の前半頃に使用されていた遺物群ということとなる。

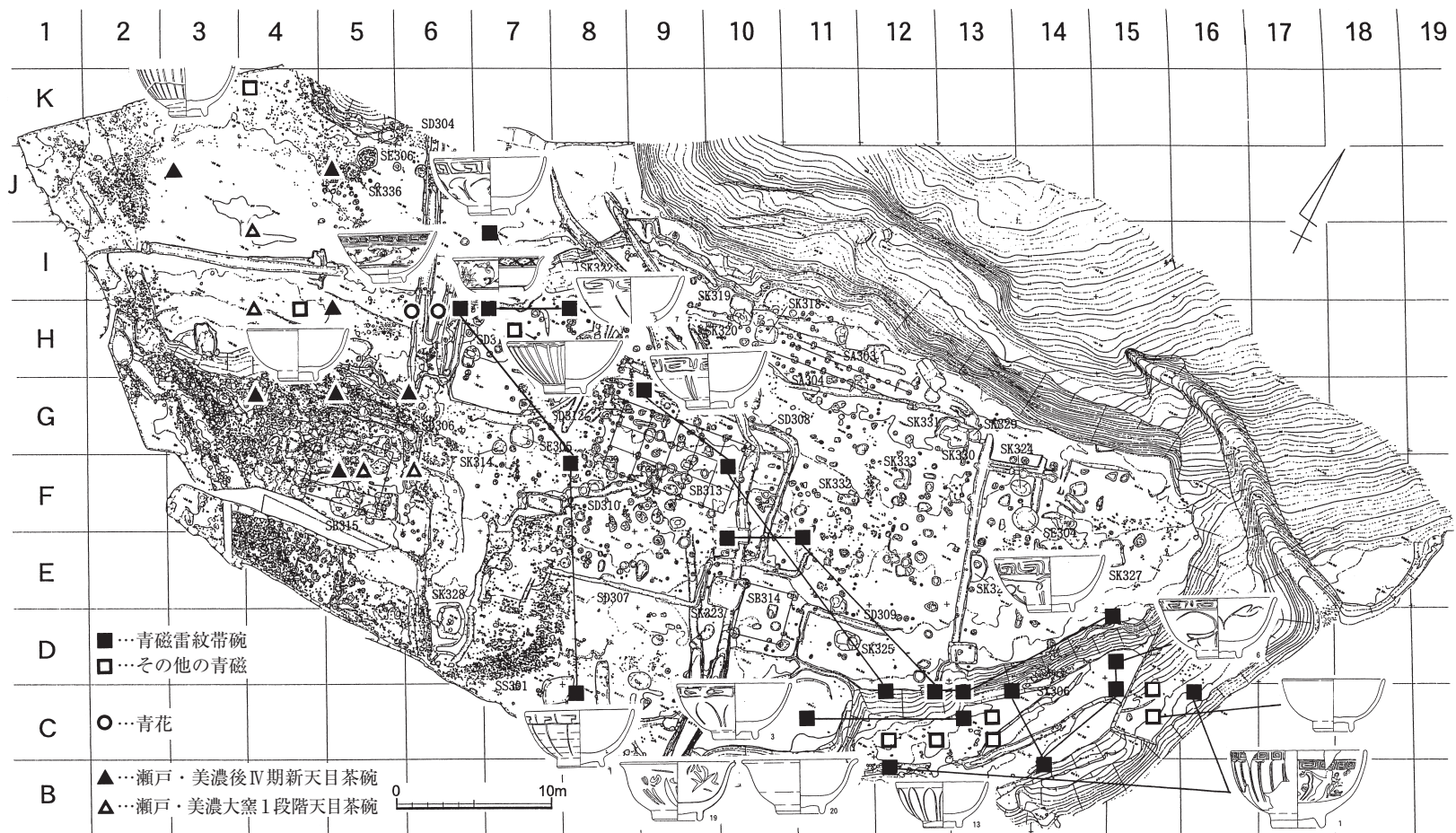
(七) 分布状況

第2図は、遺物注記より青磁等の出土位置を平面図に落としたものである。SB三三三付近から「斜炭」の注記があるC12～15グリッドにかけての遺物に接合関係がみられ、火災整理時に南東の斜面に土が片付けられたことがわかる。対して、報告者がやや新しい傾向とするI～H6～7区の遺物は、具体的には青花磁碗(第1図中段1・2)と青磁雷紋帶碗(第1図中段7、下段1・4)・筋描蓮弁紋碗(同6)がそれにあたると思われるが、すでに述べたように火災層に含まれない青磁雷紋帶碗及び筋描蓮弁紋碗等を同一視することはできない。

次いで第2図の瀬戸・美濃天目茶碗の分布をみてみよう。▲は後Ⅳ期新段階の製品、△は大窯1段階の製品である。すべて6グリッドより西



第 1 図 諏訪間興行寺遺跡第Ⅲ期出土遺物 (S = 1 : 5)



第2図 諏訪間興行寺遺跡第Ⅲ期遺物分布図 (S = 1 : 400)

側で出土していることがわかる。先程の火災層より上の青磁直縁無紋碗等も8グリットより西側から出土しており、概ね分布が一致する。したがって火災後は、敷地の西半分に主な生活場所が移ったものと考えられよう。

(八) 小結

貿易陶磁全体からみた場合、青花磁がわずかに出現しており、白磁端反皿と青磁稜花皿が出土せず、碗は線描蓮弁紋が搬入されているが、雷紋帯碗や端反碗、幅広蓮弁紋碗よりも少量という様相をみれば、十五世紀第3四半期の六十年代以降に火災が起こり、火事場整理の後は旧に比して小規模となったものと考えられる⁽⁸⁾。報告書では、最初にふれたようにⅢ期に二回の火災があった可能性に言及されているが、遺物注記を実見した結果、I-H-6・7区とC11-15区の火災層の遺物相は、同時期として問題はなく、その可能性は低いものと思われる。

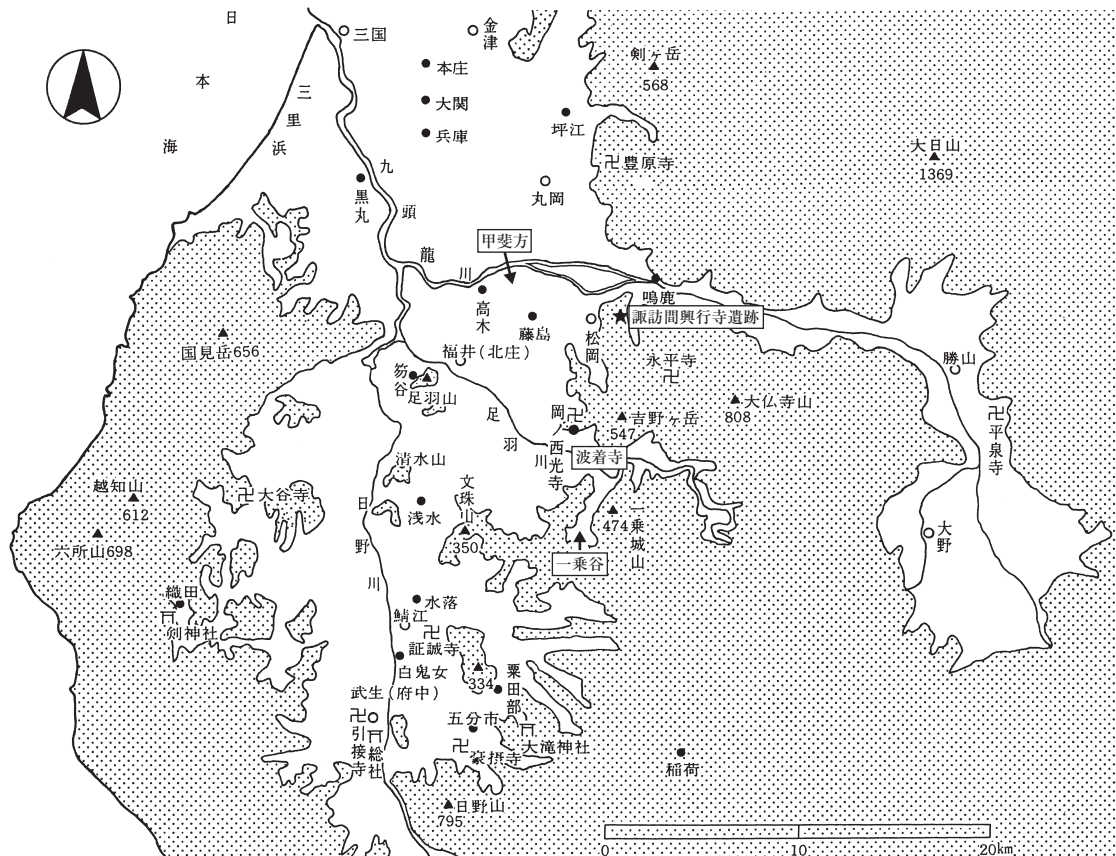
ただし、火事場整理がなされていることから第Ⅳ期に移行する前に一段階あった可能性が考えられる。これを青磁碗で比べると、次のとおりとなろう。

火災時…青磁端反無紋碗+篋描蓮弁紋碗+雷紋帯碗

火災後…雷紋帯碗+直縁無紋碗+筋描蓮弁紋碗+少量の線描蓮弁紋碗

そしてこれらは、「興行寺系図」〔平松編九七五〕に「大谷住」として康正元年（一四五五）以前〜長享三年（一四八九）⁽⁹⁾までの記載が認められることから、第Ⅲ期の出土遺物は、ひとまずその間に位置付けられよう。

ここで注目されるのは、開基で康正元年に没した「玄真」次代の「祐存」が、文明七年閏五月十五日の朝倉氏と甲斐氏の「波着



第3図 諏訪問興行寺遺跡と文明六年合戦位置図（水藤 1975 に加筆）

寺山上合戦」時に物見に出て討たれたという記載が二つの系図で認められることである（「4日野一流系図」「9別格諸寺系図」）。これは、恐らく合戦場所及び日付からみて文明六年（一四七四）閏五月十五日に一乗谷直近の波着寺・岡保で行われた合戦の誤りであろうと思われる（松原一九六二〇〇四、第3図）。

ここから、文明六年の合戦に「祐存」が巻き込まれて討ち死にし、そのことが直接関係するかどうかは不分明であるが、合戦地に近接し九頭竜川の渡河地点の南方に位置する興行寺もその折に灰芥に帰し、それがⅢ期の火災痕跡に相当すると考えることができよう。

③各地の十五世紀中葉～十六世紀中葉の貿易陶磁様相

前章において、本論のスタートたる諏訪間興行寺遺跡Ⅲ期遺物について検討を行った。本章では、その後十六世紀中葉頃までの遺物様相を示すまとまりのある遺物群を出土した十二遺跡について西方から順にみていくこととしよう。

（一）博多遺跡群

博多遺跡群からは、第一二四調査SK二三六号土坑出土一括遺物を取りあげる（福岡市教委二〇〇四、田上二〇二）。ここからは、一三六点の完形陶磁器が出土し、その内貿易磁器は百個体であった。その内訳は、青磁二十二点、白磁皿十四点、青花磁六十四点、青花磁の比率が高い。青磁は二点を除いて景德鎮窯系製品と思われ、青花磁はⅢE・F群が認められない。さらに、青釉陶器皿二十一点、緑釉陶器皿十二点を含む。田上勇一郎氏によれば、十六世紀中頃から後半の資料と考えられている（田上二〇二）。

なお、近年田中克子氏によって十四世紀後半から十七世紀前半とさ

れる博多遺跡群出土の陶磁器群が提示された（田中二〇二）。田中氏は、Ⅰ期（十四世紀後半～十五世紀中頃^⑩）に青磁雷紋帯碗・直縁無紋碗・線描蓮弁紋碗・稜花皿が認められ、それらに青花磁も伴っていると考えられる。この様相は、北東日本海域への貿易陶磁器の入り方より、器種によつては半世紀も早い時期に搬入されているように思われる（水澤二〇〇四・二〇九^a）。博多の日明貿易における位置付けを考えれば、一足早く最新の製品が搬入されるとはいえ、十二世紀段階ですでに博多から北東日本沿岸地域に多量の貿易陶磁器が運ばれていることからすれば、半世紀のズレはありえない。そこで、田中氏が「準一括性」のある遺構出土資料とされた遺物群を検討することとする。

ここでの対象は、Ⅰ期の資料群の1～6図^⑪（第4・5図に引用）であるが、その時期比定根拠は薄弱である。多くが溝出土資料であることはひとまず措くとして、図3を除いて青磁雷紋帯碗を含むが、図2～5の白磁皿・坏の高台に挟りの入るものが提示されており、これは十三湊遺跡群で出土していないことから一四四〇年前後から搬入される製品である（水澤二〇〇四）。また青磁雷紋帯碗については、田中氏が注に引く亀井明德氏の位置づけについては、十五世紀前葉以前の事例が根拠足り得ないことをすでに指摘しており（水澤二〇〇四）、上の白磁挟入高台製品と同時期以前に遡る出土例は見出し難い^⑫。そして白磁挟入高台を伴わない図1と図6については、図1は青磁筋描蓮弁紋碗の存在から十五世紀第三四半期、図6は青磁稜花皿の存在から十五世紀第四四半期に位置付けられる。したがって田中氏が提示された事例のすべてが一四四〇年以降の事例と判断される。もちろん青花磁についても、多くがその時期以降となろう。

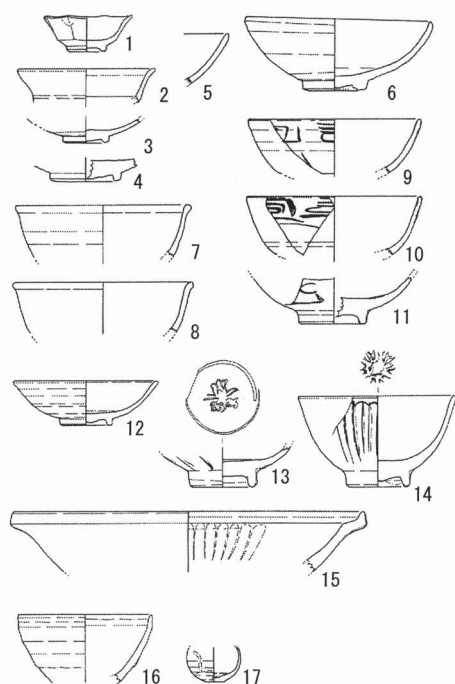


図1 HKT42 SD735

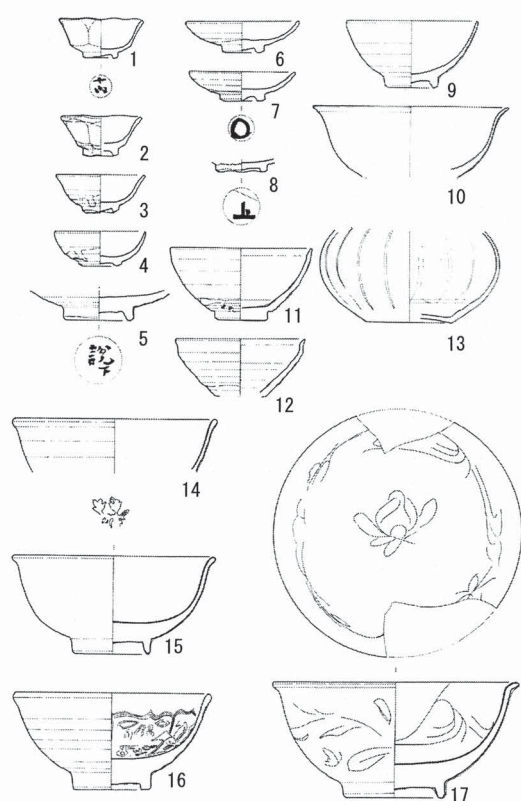


図2 HKT94 SD102

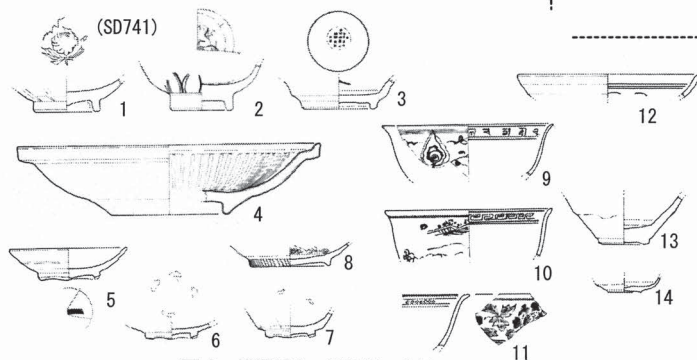
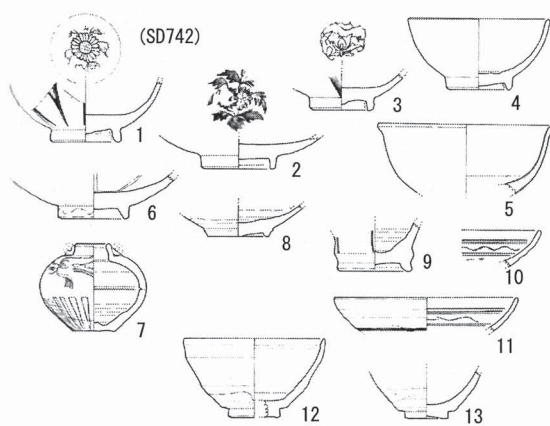
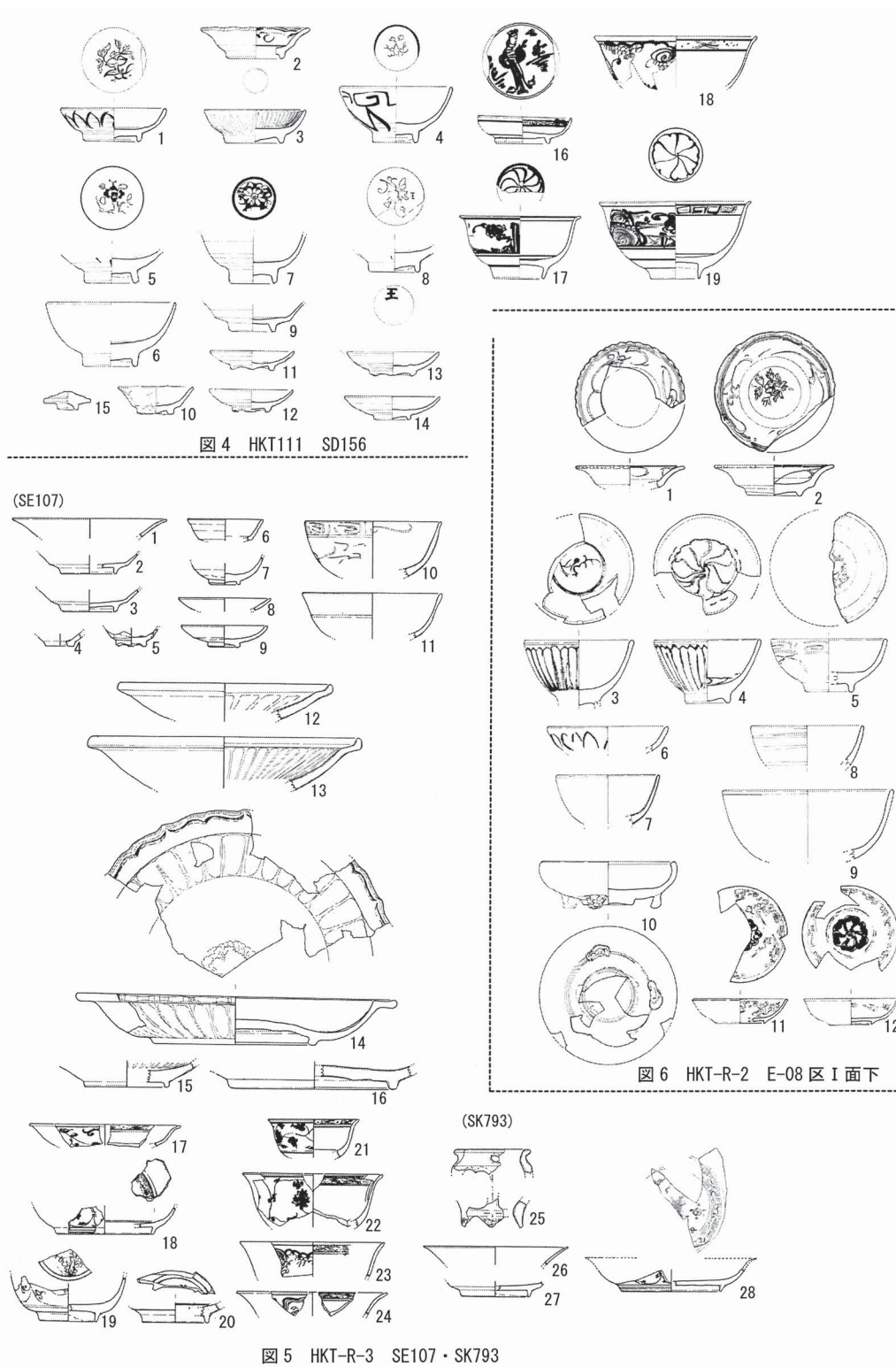


図3 HKT124 SD742・741

第4図 博多遺跡群I期(14世紀後半～15世紀中頃)貿易陶磁器1
(田中2011より転載)



第5図 博多遺跡群Ⅰ期（14世紀後半～15世紀中頃）貿易陶磁器2
(田中 2011 より転載)

(二) 新宮谷遺跡

出雲国富田荘の尼子氏の居城月山富田城の北の谷に庶子家新宮党が天文六年（一五三七）に屋敷を構えたが、尼子晴久によって天文二十三年（一五五四）に滅ぼされている。ここでは、関連する二例をとりあげる。まず、村上勇氏が紹介された「新宮谷館跡」出土品である〔島根県教委二九八三、村上二九八七〕。貿易陶磁三種は、青磁四二九点（十七パーセント）、白磁一四三四点（五十八パーセント）、青花六〇六点（二十五パーセント）の比率であった。

これら新宮谷館跡出土貿易陶磁の詳細については、近時それらの一部が紹介されたので、貿易陶磁三種にのみ限って傾向をみていこう〔西尾ほか二〇二二〕。青磁碗は、雷紋帯最末期（波状紋帯）C3が主体で、雷紋帯C2及び線描蓮弁紋碗B4が少量伴う。青磁皿は景德鎮系（碁笥底を含む）のみで稜花皿を伴わない。白磁は端反皿E群のみ。青花磁碗は端反C群主体で、漳州窯系製品も認められる。青花磁皿は、碁笥底C群主体で端反B1群が次ぎ、E群も少量出現している。

次いで新宮谷大畑地区の長方形土坑出土遺物をみる〔広瀬町教委一九八二〕。本土坑は、焼土・壁土混じりであることから、火事場整理に伴うと推定されている。青磁盤二個体・景德鎮系碗二個体・景德鎮系稜花皿四個体、白磁端反皿十二個体・坏十六個体、青花磁皿C群十二個体・皿E1群八個体・坏一個体が出土している（実見）。青磁・白磁・青花磁の比率は、十四・四十九・三十七となり、新宮谷館と似た構成となる。

なお、これらの事例から青花磁皿E2群に先行してE1群が十六世紀中葉に出現していることが柴田圭子氏によって指摘されている〔柴田二〇〇一〕。

(三) 宮内堀脇遺跡

山名氏にかかわる十五世紀末以降の但馬守護所出石の此隅山城下の遺跡である。永正元年（一五〇四）以降十六世紀代の五面の火災層が確認されている〔兵庫県教委二〇〇九、兵庫県考古博二〇一〇〕。

この五面の火災層は、それぞれ①中世1期（Ⅶ面）十九層が永正元年（一五〇四）下限、②③中世2・3期（Ⅵ・Ⅴ面）間に天文二十三年（一五五四）銘位牌が出土し上下に火災層、④中世5期（Ⅲ面）八層下限は永禄十二年（一五六九）銘木簡、⑤中世6期（Ⅱ面）六層が天正八年（一五八〇）下限と考えられ、非常に重要な年代的指標となる。

そこで報告者の岡田章一氏の考察〔岡田二〇〇九・二〇一二〕から、食膳具の様相をみていこう。

碗は、1・2期は瀬戸・美濃、3期以降は青磁、5期以降青花磁に移る。皿は、瀬戸・美濃から白磁皿へと移行し、6期までは主体。すなわち但馬の守護所城下の武家屋敷では、十六世紀前半段階は瀬戸・美濃碗皿主体で、十六世紀中葉・後半にかけて白磁皿・青磁碗、十六世紀後半代に白磁皿と青花磁碗へ変化するとなった。

このように京に程近い但馬における食膳具において、十六世紀前半に国産陶（瀬戸・美濃）主体で、中葉になって貿易陶磁（青磁・白磁）主体に変化することは興味深い現象である。さらに青花磁碗が主体となるのは5期一五六〇年以降で、さらに皿の主体は一五八〇年まで白磁が占め続けるという様相も注目される。ただし3・4期というのは、遺構の変遷は追えるものの時間的には十年ほどにすぎず、青磁碗が碗の主体を占めるという様相は、一時的な現象であることにも注意が必要である。

なお、漆器一七〇点以上が図示されており、木製品の特性上4期（Ⅳ面）以下の出土が多いが、看過することはできない。特に碗が九割以上を占めていることから、十六世紀代において陶磁器碗は従属的な存在で

あったと考えられよう。⁽¹⁴⁾

(四) 臨川寺跡

応永二年（一四六八）に焼亡した京都右京区の臨川寺三合院の建物床面出土の食膳具の組成は、青磁十六個体、白磁三十個体、青花磁四十八個体、舶載天目九個体、瀬戸・美濃天目九十三個体からなる（「瀬崎・堀内一九九五」）。天目茶碗が百点を超えていることは、禪宗寺院の煎茶喫湯儀礼を物語っている（「祢津二〇〇三・二〇〇四」）。ここでは本稿の関心に副って、天目を除く貿易陶磁を比較しておこう。青磁・白磁・青花磁は、十七・三十二・五十一となり、青花磁が卓越する。

これらの陶磁器群について吉岡康暢氏は、「青磁線細蓮弁紋碗・稜花皿＋白磁外反皿＋青花磁外反皿がセットとなるV古期の陶磁組成は受容されていないと判断される。臨川寺跡出土の青花磁は、京の内、二階殿落ち込みの陶磁群との差異を十年ほどの時期差だけでは説明できず、入手ルート異なる日明勘合貿易の所産にかかる精製陶磁と考えられる」と評価した（「吉岡二〇一二・五六頁註七」）。後段の青花磁については同意見であるが、前段の青磁線細蓮弁紋碗（B4）・稜花皿、白磁外反皿、青花磁外反皿については、一四六八年の時点で出現していないために出土しなかったと考えられよう。⁽¹⁵⁾ もちろんこれらの器種は、すべて首里城京の内SKO一でも出土していない。

なお、京に近い堺環濠都市遺跡では、十五世紀第3四半期後半頃に少量の青花磁端反碗・皿C群が出現していると考えられる（「第6図、續二〇二」）。これらの事例に前章の興行寺例を参酌すれば、右の各器種がすべてそろっているのは十五世紀第4四半期のことと考えられよう。

(五) 山科本願寺一四次調査

十四次調査地点は、天文元年（一五三二）の山科本願寺の焼き討ち時

の遺構・遺物がみつかり（「京都市文化市民局二〇〇六」、「御本寺」の会所的役割をもつ「御亭」の可能性が考えられている（「柏田二〇〇六」）。山科本願寺は、文明十年（一四七八）からの建設であるが（「西川一九九七」）、調査は遺跡の保存が決まったため、焼亡面のみの調査であり、一五三二年段階の状況を示すものである。

報告書では、出土遺物の破片数が記されており（一二二頁表17）、青磁三五六点（三十二パーセント）、白磁二二九点（二十一パーセント）、青花磁五一七点（四十七パーセント）であった。

本遺物については、柴田圭子氏が二〇〇六年に資料調査を行われ、以下の点を指摘されている（「柴田二〇〇七」）。

青磁では、龍泉窯系碗B4類が盛行し、B3・D・E類が若干存在する。波状紋碗C3類はみられない。景德鎮窯系碗・皿が一定量存在する。

白磁では、皿坏E1群が盛行し、E2群が一定量存在する。

青花磁では、碗D群・皿B1群が盛行し、碗C群が一定量存在する。

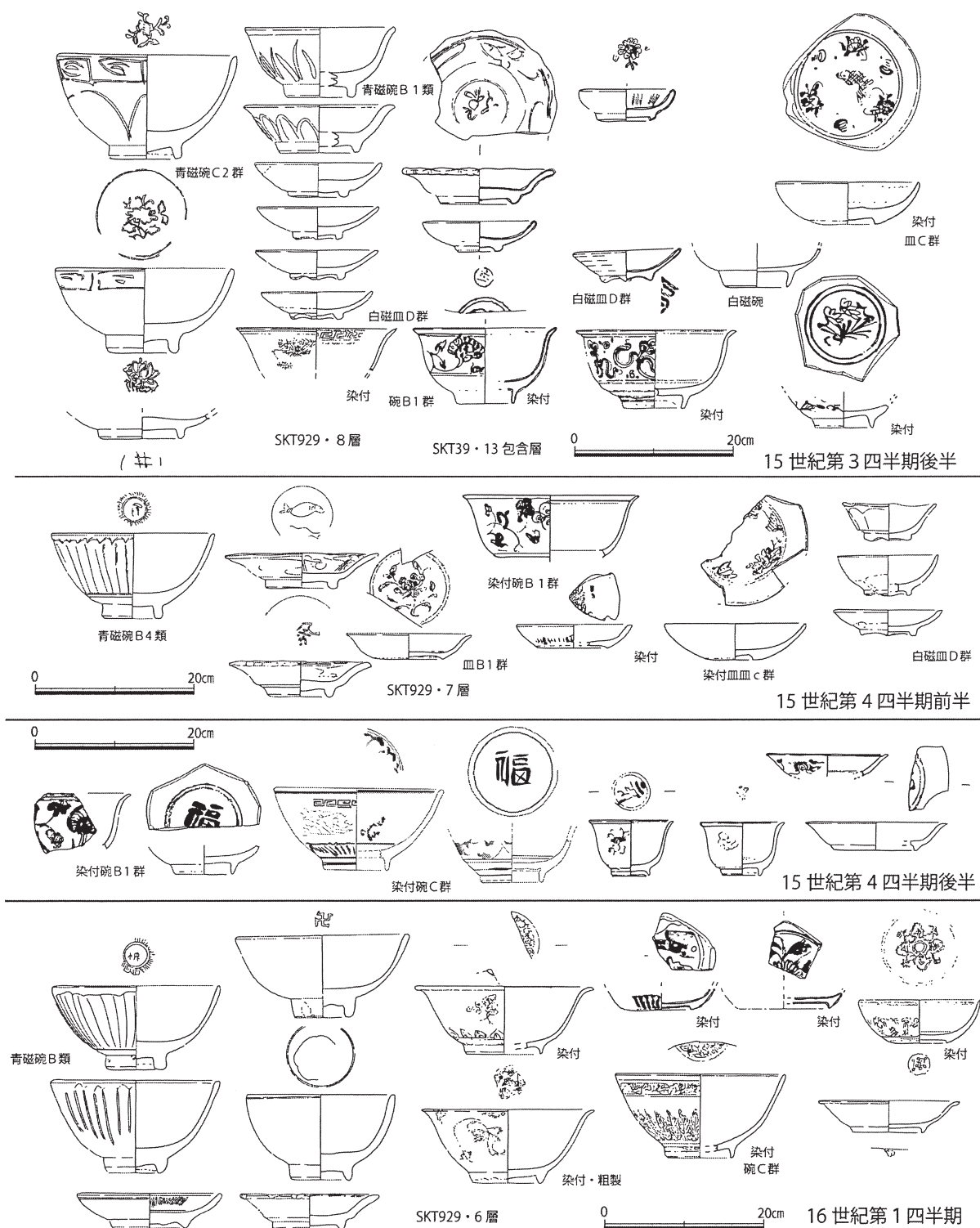
碗E群・皿C群・E群、華南系青花磁はみられない。

そして、十六世紀中葉よりも古相を示す特徴として、青磁碗B4類・青花磁碗D群の盛行と青花磁碗C群が少数であることをあげ、さらに華南系青花磁・皿C群、青磁波状紋碗の不在もその可能性を示すものとされた。

筆者もその重要性に鑑み、二〇〇九年十一月二日に財団法人京都市埋蔵文化財研究所において遺物を実見させていただいた。

第2表は、青磁三二一点、白磁二一五点、青花磁四九七点、多彩磁器十七点、舶載天目茶碗六点の合計一〇五六点の遺物組成である。⁽¹⁶⁾

柴田氏の考察に加えるならば、青磁では酒海壺や大型香炉・盤などの大型製品が半分を占め、食膳具では龍泉窯系と景德鎮窯系がほぼ同数となる。景德鎮系の製品には、通有の無紋製品以外に釉下に樹木様の線刻を入れるものや丸彫蓮弁紋、輪花碗などがあり、新奇な製品が認められ



第 6 図 堺環濠都市遺跡における中国製陶磁器の変遷
(續 2011 より転載)

第2表 山科本願寺14次調査貿易陶磁器組成

青磁	破片数	%	備考
雷紋帯碗 C2	4	1	
直縁碗 E	7	2	
線描蓮弁紋碗 B4	50	16	
皿・坏	5	2	
大型製品	151	47	
香炉	1	—	
龍泉窯系不明	28	9	龍泉窯系合計 246
景德鎮窯系	75	23	輪花 24
青磁合計	321		
白磁	破片数	%	備考
端反皿 E1E2	122	57	
輪花皿	34	16	
坏	10	5	
直縁碗	12	6	
端反碗	11	5	
碗	14	7	
壺	1	—	
不明	11	5	
白磁合計	215		
青花磁	破片数	%	備考
皿 B1	277	56	
皿不明	7	1	
大皿	4	1	
碗 D	139	28	C 群を含む
碗体部	48	10	
外青磁碗	10	2	内面青花
鉢	3	1	
坏	3	1	
壺	6	1	
青花合計	497		
多彩磁器	17		五彩碗 1 個体
舶載天目	6		5 個体
総計	1056		

る。

白磁は、皿 E1 が E2 の倍ほどで、輪花皿が十六パーセントを占める。碗は二割に満たない。輪花皿は、外面に蓮弁様の線描を入れるものがあり、これは青磁景德鎮系製品と共通する意匠である。

青花磁は、皿が端反 B1 のみで半数以上を占める。碗も四割を占め、内面青花磁で外面青磁という製品が認められることが注目される。

碗皿に限れば、青磁一四一点（十七パーセント）、白磁一八〇点（二十二

パーセント）、青花磁四九三点（六十一パーセント）となり、各種に最新モードの製品が入っているところが、蓮如が築きあげた一大勢力である本願寺の威勢を物語っているよう。

そして、一五三二年時点の畿内で最も重視された陶磁器としては、青磁大型製品（瓶類・香炉）の存在があげられ、青花磁ではないことにも注意する必要がある⁽¹⁷⁾。

第3表 愛媛・広島・高知出土輸入陶磁器の時期別破片数
(柴田 2004 より転載)

50点以上出土遺跡対象 ※%は同遺跡中を示す。

遺跡名	15 世紀前葉～後葉										15 世紀後葉～ 16 世紀前半										16 世紀中葉～後半									
	青磁								白磁	小計	%※	青磁						白磁	青花				華南		小計	%	合計			
	蓮 B2	蓮 B3	雷 C2	龍 D	龍 E	稜花 A	龍Ⅳ	D	蓮 B4			雷 C3	E-1	碗 C	皿 B1	皿 C	青磁	皿景	E-2	碗 E	皿 B2	皿 E	青花							
湯築城跡	18	47	3	12	92	113	54	65	404	4.6	329	164	4,003	693	907	758	6,854	78.1	562	576	58	11	312	-	1,519	17.3	8,777			
見近島城跡	0	7	1	4	36	79	0	7	134	7.1	59	108	751	160	411	51	1,540	81.8	197	10	0	0	1	-	208	11.1	1,882			
太田城跡	0	8	2	11	1	8	4	0	34	56.7	6	0	5	1	2	1	15	25.0	7	3	1	0	0	-	11	18.3	60			
旧等妙寺跡	20	0	4	4	5	7	0	5	45	23.9	12	2	56	8	47	4	129	68.6	0	5	6	0	3	-	14	7.4	188			
河後森城跡	5	4	9	7	11	14	1	5	56	28.6	18	3	33	7	38	6	105	53.6	7	8	6	4	10	-	35	17.9	196			
愛媛合計	43	66	19	38	145	221	59	82	673	6.1	424	277	4,848	869	1,405	820	8,643	77.8	773	602	71	15	326	-	1,787	16.1	11,103			
大通院遺跡	15	8	6	34	8	5	1	29	106	6.6	42	3	416	37	29	52	579	35.9	33	58	327	33	388	88	927	57.5	1,612			
吉川元春館	0	0	0	1	7	0	0	2	10	1.3	5	0	50	3	2	1	61	7.8	51	16	302	9	142	193	713	90.9	784			
万徳院跡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0	0	0	1	0	0	0	1	0.5	0	15	125	0	80	23	220	99.5	221			
小倉山城跡	1	6	8	30	7	15	0	5	72	60.0	42	0	0	0	6	0	48	40.0	0	0	0	0	0	0	0	0.0	120			
薬師城跡	2	4	0	6	24	81	2	13	132	65.3	4	3	22	0	3	2	34	16.8	1	8	7	7	13	6	36	17.8	202			
亀崎城跡	5	2	1	34	2	0	0	21	65	95.6	3	0	0	0	0	0	3	4.4	0	0	0	0	0	0	0	0.0	68			
加井妻城跡	5	3	12	34	8	2	2	11	77	98.7	0	0	0	0	1	0	1	1.3	0	0	0	0	0	0	0	0.0	78			
広島合計	28	23	27	139	56	103	5	81	462	15.0	96	6	489	40	41	55	727	23.6	85	97	761	49	623	310	1,896	61.5	3,085			
姫野々土居	19	4	20	32	24	15	19	41	174	47.7	65	0	78	10	20	4	177	48.5	0	5	4	4	1	-	14	3.8	365			
姫野々城跡	2	0	5	30	8	14	3	9	71	29.6	26	0	35	0	55	29	145	60.4	0	0	0	22	2	-	24	10.0	240			
岡豊城跡	0	0	1	7	6	4	0	1	19	8.1	5	0	80	12	36	10	143	60.6	0	0	29	11	34	-	74	31.4	236			
芳原城跡	6	0	8	51	6	14	5	49	139	61.2	21	4	25	5	6	11	72	31.7	0	9	3	4	0	-	16	7.0	227			
扇城跡	6	2	11	112	3	32	24	9	199	91.3	13	1	0	0	5	0	19	8.7	0	0	0	0	0	-	0	0.0	218			
中村城跡	0	0	0	7	4	7	0	0	18	20.0	16	2	16	5	15	11	65	72.2	0	2	1	1	3	-	7	7.8	90			
西本城跡	0	1	4	0	0	30	3	11	49	60.5	20	0	0	0	12	0	32	39.5	0	0	0	0	0	-	0	0.0	81			
田村遺跡群	14	20	13	41	18	12	9	29	156	68.1	36	3	9	1	9	7	65	28.4	0	2	2	0	4	-	8	3.5	229			
アゾノ遺跡	3	0	0	25	5	0	1	15	49	94.2	2	0	0	0	1	0	3	5.8	0	0	0	0	0	-	0	0.0	52			
風指遺跡	0	3	4	18	0	3	0	14	42	89.4	5	0	0	0	0	0	5	10.6	0	0	0	0	0	-	0	0.0	47			
五藤家屋敷跡	0	0	2	7	3	4	1	1	18	33.3	6	0	1	6	6	1	20	37.0	1	0	4	1	10	-	16	29.6	54			
高知合計	50	30	68	330	77	135	65	179	934	50.8	215	10	244	39	165	73	746	40.6	1	18	43	43	54	-	159	8.6	1,839			

…同一遺跡中において占める比率が50%以上の時期にマーク (日本貿易陶磁研究会 2000・2002より作成)



第7図 三重県山田城跡出土貿易陶磁分布図
(東員町教委 1984 より転載)

（六）伊予

前段まで博多から日本海沿いに京までの遺跡をみてきた。ここでは、瀬戸内西部について瞥見しておこう。第3表は、柴田圭子氏が作成された表である〔柴田（二〇〇四）が、ここから最も多量の貿易陶磁が出土している愛媛の様相をみておきたい。⁽¹⁸⁾〕

十五世紀前葉～後葉は、六七三点中、青磁が五九一点八八パーセント、白磁が八十二点十二パーセントを占める。

十五世紀後葉～十六世紀前半は、八六四三点中、青磁が七〇一点八パーセント、白磁が四八四八点五十六パーセント、青花磁が三〇九四点三十六パーセントを占める。

十六世紀中葉～後半は、一七八七点中、青磁七七三点四十三パーセント、白磁六〇二点三十四パーセント、青花磁四一二点二十三パーセントを占める。

青磁稜花皿の位置付け等は私見とやや異なるが、概ねの傾向は把かめよう。なお、愛媛における十六世紀中葉～後半の青花磁の割合が低い、広島と同時にみると青花磁が九割を超えており、掲載遺跡からみて前者が十六世紀中葉、後者が十六世紀後半（末）の比率を示しているようか。

（七）山田城跡

北勢桑名の西側に位置する員弁郡東員町に所在した山城で、遺物の多くを占める瀬戸・美濃大窯製品からみて、1段階から始まり2段階が主体で下限とする遺跡と考えられる〔東員町教委二九八四〕。

貿易陶磁については、青釉・緑釉型押陶器皿の出土が注目されるが、青磁は非常に少なく、白磁はE群皿、青花磁碗はC・E群、青花磁皿はB1・C群からなる。

貿易陶磁器の詳細な破片数は不明であるが、報告書の分布図（第7図）

からひろってみると、青花磁二十五点、白磁百点、三彩十五点となる。⁽¹⁹⁾ 青磁は、分布図にないが本文の記述から二点のみの出土である。図示されている実測図は、青花磁十一点对し白磁は四点にすぎないが、実際の出土数は白磁が青花磁の四倍出土していることになる。

大窯2段階の下限は、一五六〇年頃とされており〔藤澤ほか二〇〇七〕、前稿でも指摘した十六世紀中葉の白磁皿の卓越は、後述の真里谷城跡と合わせて畿内以東においても認められる。

（八）沓掛城跡

愛知県豊明市沓掛町に所在する沓掛城跡は、十六世紀末頃に廃城となったとされているが、ここでは松原隆治氏が紹介された五枚の天文十七年（一五四八）銘木簡を伴った池跡出土遺物を取りあげる〔松原一九八六〕。

池跡SG〇一出土の瀬戸・美濃は大窯1～2段階の製品のみで、埋没は一五六〇年下限とされる。貿易陶磁は、白磁二十六点、青花磁十一點の出土で、青磁は出土していない。

（九）勝間田城跡

遠江牧之原市勝間田に所在する山城で、文明八年（一四七六）に今川氏により落城し廃絶したとされ、出土瀬戸・美濃は後IV期新段階最末期の基準資料とされている〔藤澤二〇〇八〕。⁽²⁰⁾

該期の貿易陶磁については、青磁線描蓮弁紋碗B4十三点、同雷紋帯碗C2十三点、同直縁碗五点、同端反碗二点、同稜花皿十五点の計四十八点、白磁内湾皿十一點、同皿E1群三点、同八角坏二点の計十六点、青花磁碗B群七点、同皿B1群六点の計十三点、他に赤絵皿二点、天目茶碗八点となる〔菊川シンボ二〇〇五〕。⁽²¹⁾

(十) 真里谷城跡

上総木更津に所在する真里谷城跡は、真里谷武田氏の本城、あるいは反惣領側によって新たに取立てられた「新地之城」とされ、天文六年（一五三七）に落城したとされる〔木更津市教委「九八四」〕。

近年房総では、井上哲郎氏と築瀬裕一氏を中心に城館出土遺物の詳細な分類集計が行われており、ここでもその成果に基づいて、真里谷城跡の遺物をみていきたい〔築瀬二〇〇七、井上二〇一二〕。

瀬戸・美濃は、後Ⅳ期新く大窯Ⅰ段階がほとんどで、一点のみ大窯Ⅱ段階とされる〔井上二〇〇五・二〇一二〕。このことは、遺物の下限が文献と一致することを意味する。

貿易陶磁食膳具は、青磁線描蓮弁紋碗七点、同端反皿二点、同盤等十三点の計二十二点、白磁内湾皿一点、同端反皿E群二九四点、同青花磁C群写皿十五点、同大皿一四〇点の計四五〇点、青花磁碗B群十七点、同碗C群二点、同碗D群四十七点、同皿B1群一四七点の計二一三点を数える。

(十一) 小谷城跡

浅井久政・長政の近江湖北の山城で、天正元年（一五七三）年に越前一乗谷と同時期に落城している。築城は、大永四年（一五二四）とされる〔湖北町教委「二九八八」〕。

この約五十年間の貿易陶磁の内訳は、青磁碗B4群、同稜花皿等計三十七点、白磁E群等二六一点、青花磁碗C・D群、同皿B1・B2・C・E群計一八八点である。

(十二) 至徳寺遺跡

越後守護所と目される遺跡で、上杉氏の迎賓館であったが、越後永正

の乱により永正四年（一五〇七）～七年（一五一〇）の間に焼亡した〔水澤・鶴巻二〇一二〕。

被災時の片付け土坑であるSX〇〇四・SX〇一九などから瓶や鉢を含む高級青花磁や青磁酒海壺、瓦器風炉・瓦燈等が出土しており、この二遺構では青花磁が卓越する。

残念ながら遺構ごとの遺物詳細は不明であるが、筆者集計の遺物点数表〔水澤・鶴巻二〇〇三、第三表〕から十五世紀後半以降の貿易陶磁食膳具を抜き出すと、以下のとおりとなる。青磁雷紋帯碗四十点、同線描蓮弁紋碗一三〇点、同直縁碗四十五点、同稜花皿五十七点、同盤一一四点計三八六点、白磁皿坏D群二一〇点、⁽²²⁾同端反坏五点、同端反皿E群八十八点計三〇三点、青花磁皿B1二七七点、同大皿三十点、同碗B群等八十六点計三九三点、天目茶碗一一三点。

④ 十五世紀中葉～十六世紀中葉の貿易陶磁器の実像

(一) 貿易陶磁食膳具の組成変遷

以上、十五世紀中葉～十六世紀中葉における日本各地の廃絶時期が判明する資料をみてきた。これらの資料群に前稿で取り上げた遺跡（見近島城跡・一乗谷朝倉氏遺跡・鯨ヶ尾城跡）を加えて年代順に並べ、青磁・白磁・青花磁の各点数と三者の比率を記したのが第4表である（六）伊予を除く。以下、本表から読み取れるところを記す。

青磁は、十五世紀後半の通常の遺跡では六割を超えており、十六世紀第1四半期で三割強、十六世紀第3四半期まで二割強を占める。ただし十六世紀第2四半期以降は、青磁食膳具以外の製品を所有しえないクラスの遺跡及び景徳鎮窯系青磁が入手できない場合は、ほとんど出土しないことになる。

第4表 15世紀中葉～16世紀中葉の貿易陶磁組成

遺跡名	所在地	性格	遺構	廃絶時等	青磁 (%)	白磁 (%)	青花 (%)	備考
臨川寺三合院跡	京	禪宗寺院	建物床面	1468年	16 (17)	30 (32)	48 (51)	個体数
諏訪問興行寺遺跡	越前	真宗寺院	第Ⅲ面	1474年	982 (65)	494 (33)	35 (2)	
勝間田城跡	遠江	山城		1476年	48 (62)	16 (21)	13 (17)	
至徳寺遺跡	越後	守護所	迎賓館	1510年	386 (36)	303 (28)	393 (36)	
山科本願寺跡 14次	山科	真宗寺院	御亭	1532年	321 (31)	215 (21)	497 (48)	
真里谷城跡	上総	山城		1537年	22 (3)	450 (66)	213 (31)	
沓掛城跡	尾張	城跡	池跡	1548年	—	26 (70)	11 (30)	木簡
新宮党館跡	東出雲	館跡		1554年	429 (17)	1434 (58)	606 (25)	1537年成立
新宮谷大畑地区	東出雲	城下	土坑	1554年	8 (14)	28 (49)	21 (37)	個体数
山田城跡	北勢	山城		1560頃	2 (2)	100 (79)	25 (20)	大窯2下限
博多遺跡群	筑前	港湾	埋納遺構	16中～後	22 (22)	14 (14)	64 (64)	個体数
見近島城跡	伊予	城跡	島嶼部	16中葉	542 (24)	931 (42)	752 (34)	
一乗谷朝倉氏遺跡	越前	館・城下町		1573年	5569 (26)	9171 (42)	6895 (32)	本報告分
小谷城跡	北近江	山城		1573年	37 (8)	261 (54)	188 (39)	
鮫ヶ尾城跡	越後	山城		1579年	4 (2)	30 (12)	214 (86)	

なお、この時期の青磁について森達也氏は、「日本の十六世紀代の遺跡では龍泉窯青瓷の出土は少なくないが、それらにはレナ沈船揚げの龍泉窯青瓷と共通する特徴が認められ、十五世紀代または十六世紀初頭頃までのうちに日本に運ばれたものが十六世紀前半まで使われて廃棄された可能性も考える必要がある。なお、筆者は、十六世紀に入ると龍泉窯青瓷の輸出量は急速に低下して、それに替わって景德鎮窯で生産された青瓷の輸出が増えるのではないかと考えて」いるとされた〔森二〇〇九、二五七頁〕。このことはすでに十六世紀中葉の青磁について柴田圭子氏が指摘されており〔柴田二〇〇二〕、筆者も追認したところである〔水澤二〇〇九a〕。そして、森氏が龍泉窯系青磁の輸出が激減した時期を十六世紀初頭に遡らせられた根拠としては、福建牛屎礁引揚げ遺物に青磁が含まれていないことのみである（同一五八頁）。しかし、牛屎礁引揚げ遺物には景德鎮窯系青磁も含まれていないことから、本例をもって龍泉窯系青磁の輸出の激減を云々することは不適當と思われる。したがって現状では、本稿でとりあげた山科本願寺例からみて、一六三〇年頃が景德鎮系青磁の日本に搬入された初現であるということがいえ、その頃を境に龍泉窯系から景德鎮窯系青磁にシフトしたと考えておきたい。

白磁は、十五世紀後半から十六世紀第1四半期にかけて二～三割を占めているが、一五三〇年代から増加し六十年までは五割以上を占めるに至り（十六世紀中葉の白磁皿の卓越）、七十年頃まで四割を保つ。

青花磁は、十五世紀後半～十六世紀前半において日本の枢要を占める遺跡では、五割を占める場合も認められるが、⁽²³⁾ 大多数の遺跡では十五世紀後半で二割以下、十六世紀前半～七十年頃まで三割程度である。十六世紀に入ると全体量は増加しているものの、白磁が三十年代に増加するため、全体では三割を超えるにとどまっているものと思われる。そして、十六世紀第3四半期の六十年代に入って輸入品の大部分を青花磁が占めるようになったため、第4四半期の天正年間以降では出土貿易陶磁のほ

とんどが青花磁となるものと考えられる。

なお、見近島城跡の三者の比率は、青磁二十四パーセント、白磁四十二パーセント、青花磁三十四パーセントであり、この比率は一乗谷の比率とほぼ一致することから、両者の終焉は近接するように思われ、十六世紀第三四半期の組成を示している。

次いで、これらの様相から、例えば『山陰における中世後期の貿易陶磁』〔山陰中土研二〇〇九〕所収の伯耆・出雲境に位置する鳥取県南部町手間要害出土貿易陶磁比率をみると、青磁波状紋帯碗・線描蓮弁紋碗B4等十一パーセント、白磁皿E1中心で五十パーセント、青花磁碗BC E同皿C群を中心に三十九パーセントである〔中森二〇〇九、総数二四三三点〕。青花磁皿E・F群の出土がわずかながら認められるため廃絶期は第四四半期まで下るものと思われるが、貿易陶磁の中心は十六世紀中葉であることが推定される。

また、山名氏の因幡守護所とされ文正元年（一四六六）築城で天正元年（一五七三）に廃城となったとされる鳥取市天神山遺跡の貿易陶磁器の比率は、青磁線描蓮弁紋碗B4・同稜花皿直縁碗等五十一パーセント、白磁皿D・E1が半々で十パーセント、青花磁皿はB1群中心で三十九パーセントである〔中森二〇〇九、総数二二〇点〕。青花磁碗E群同皿E群がわずかに出土しているため天正元年まで何らかの遺構が残っていたと思われるが、遺跡の中心時期は、せいぜい文正元年から半世紀後くらいまでと考えられよう。⁽²⁴⁾

なお、青釉・緑釉型押陶器皿がともに出土した博多遺跡群一二四次SK二三六と北勢山田城跡出土遺物群は、近接した時期と想定されるが、貿易陶磁器の組成は大きく異なる。前者が埋納遺構であることから単純な比較は難しいが、白磁・青花磁の比率から博多例がより新しい時期の遺物群であると考えられよう。ただし、アジアからの入口である港湾都市である博多の場合は、他所よりも最新製品の量が多く保有されていた

可能性もあり、本例をもって日本国内の同時期の遺跡での使用状況を類推することは、難しいであろう。

（二）非日常的器種の様相

詳細は別稿に譲らねばならないが、ここで食膳具以外の器種についても付言しておく。

小野正敏氏は、日常の碗皿と対照的な白磁四耳壺や青白磁梅瓶、青磁香炉・花瓶・盤・壺などを非日常の「威信材」と位置付けられ、一定階層以上の表象となっていることを明らかにされた〔小野二〇〇三〕（第5表）。そしてこれらは骨董品であり、伝世品であることが特徴であるとされた（同五五六頁）。

それらがもつステータスシンボルとしての位置付けについては異存ないが、ここで問題としたいのは、それらの年代観である。

まず青磁の酒海壺・花瓶・大香炉等については、国人領主クラスであれば、なんらかは所持していたと考えられる。そして青磁盤は、さらに下の階層と考えられる遺跡でも認めることができる。⁽²⁵⁾

これらについてすべて骨董品だとすると、宋元のいわゆる袋物が大量に戦国期の日本へ入ってきたことになる。もちろん鎌倉時代に入ってきて、伝世されてきたものもいくらかはあるであろうが、少なくとも大多数の龍泉窯系青磁は、十五世紀代にもたらされたと考えるのが自然であろう。

近年、明代龍泉窯青磁の様相が明らかになってきており〔大阪市立東洋陶磁美術館編二〇一二〕、すでに青磁盤・酒海壺・花瓶については、明代の製品の存在が指摘されている〔鶴巻二〇〇一、亀井編二〇〇二〕（第8図）。これらの研究成果により、小野氏が集成された一覧表（表5）の中の少なからずの青磁製品がリアルタイムで搬入されていると考えられ、どれくらいたてば伝世品といえるのかはわからないが、十五世紀の搬入後一

第5表 主要な中国陶磁威信財の確認例（小野 2003 より転載）

遺跡名	梅瓶・四耳壺	青磁盤	青磁酒海壺	青磁花生	青磁太鼓胴盤	天目茶碗・茶入・茶壺	元様式染付	その他	庭園	備考		
矢不來館		○				○		染付水注		北海道	15 中	1457 年か・火事
浪岡城	○	○	○	○		○		白磁陶枕	■	青森・北畠氏	16 後	
根城	○	○	○ h			○		青磁馬上杯、青白磁水注、堆朱	■	青森・南部氏	16 後	
聖寿寺館		○	○	○		○		瑠璃釉水注、染付瓶、青磁天目台か		青森・南部氏	15 ～ 16	1539 年火事か
丸子館	○	○		○		○		青白磁水注・小壺、青磁浮牡丹花瓶		岩手・鬼柳氏	15 中	火事
小田島城	○	○	○ h		○	○		青白磁合子、大香炉、泉州系洗		山形・東根氏	15 後	
藤島城	○	○		○		○				山形・土佐林氏	15 後	1477 年火事か
江上館	○	○		○	○	○		粉青沙器瓶子	■	新潟・中条氏	15 後	
堀越館		○				○		青磁大香炉		新潟・SX34	15 中	1423 年火事か
至徳寺	○	○	○ m	○		○	玉壺春	釉裏紅碗、染付輪花鉢、青磁水注		新潟・上杉氏寺院	15 後	
高梨館		○	○	○	○				○	長野・中野氏	15 後	1461 年か・火事
小曾崖城		○					玉壺春	青磁浮牡丹大香炉		長野・新野（中野）氏	15 中	
大倉崎館	○	○				○		青磁浮牡丹大香炉	■	長野	15 中	火事
朝倉館		○	○ s	○	○	○	酒海壺・盤	高麗青磁陶枕、白磁瓜形鉢、五管瓶、洗	○	福井・朝倉氏	16 後	1573 年
金山城	○	○	○ h	○		○		青磁大香炉・袴腰香炉		群馬・横瀬氏	～ 16 後	火事
武田館	○	○	○ h		○	○	酒海壺		○	山梨・武田氏	16 後	
新府城		○		○		○		龍文褐釉四耳壺、青磁琮型花生		山梨・武田勝頼	16 後	
八王子城	○	○	○ h	○		○		ベネチアングラス	○	東京・北条氏照	16 後	
本佐倉城	○	○	○	○		○				千葉・千葉市	16 後	
白井城	○	○				○				千葉・原氏	16 後	
一宮城	○								○	千葉・正木氏	16	
大野城	○	○								千葉・狩野氏	15 後	
篠本城		○				○				千葉・	15 前	
青島城		○				○		高麗青磁梅瓶、青磁大香炉		埼玉		
河越館	○	○				○		青磁花瓶、泉州系洗、青白磁合子		埼玉	～ 16 初	火事 1368 か 1494 か
小田城	○	○	○ h	○	○	○		高麗青磁瓶か・青白磁小壺	○	茨城・小田氏	16 後	火事
祇園城	○	○		○		○		青磁浮牡丹大香炉・播磨茶入		栃木・小山氏	15 中	1439 年か・火事
飛山城	○	○	○ h	○	○			白磁火屋香炉？		栃木・芳賀氏	14 後	1341 か 63 年
梁川城※	○	○	○ s						○	福島・伊達氏	16 前	
小塙城	○	○				○			■	福島	15 後	1474or92 火事
松岡城		○		○		○		青磁琮型花生		長野	15 後	
江馬館	○	○		○		○		高麗青磁碗・青白磁透香炉・水注	○	岐阜・江馬氏	15 中	
尾崎城	○	○	○ m	○	○	○	稜花皿	青磁馬上杯、朝顔型天目	■	岐阜	15 中	
東氏館※	○	○				○		青白磁合子、水注、瀬戸播磨茶入	○	岐阜・東氏	15 中	
小川城	○	○	○ s	○				袴腰香炉、泉州系洗		静岡	15 後	火事
大宮城	○	○	○	○		○		高麗青磁か、泉州系洗		静岡・富士大宮司	～ 15 後	
葛山館	○	○			○	○		泉州系洗、瀬戸播磨		静岡	～ 15 前	火事
山名館		○		○		○		青白磁合子、青磁花瓶		鳥取・山名氏	15 後	火事
富田城		○	？	○		○		磁州窯鉄絵壺、青磁大花瓶		鳥根・尼子氏	15 後	火事
大内館		○	○	○		○		高麗青磁陶枕	○	山口・大内氏	16 後	
湯築城	○	○	○	○	○	○		高麗青磁瓶子	○	愛媛・河野氏	16 後	
勝瑞館	○	○		○		○		染付扁壺	○	徳島・三好氏		

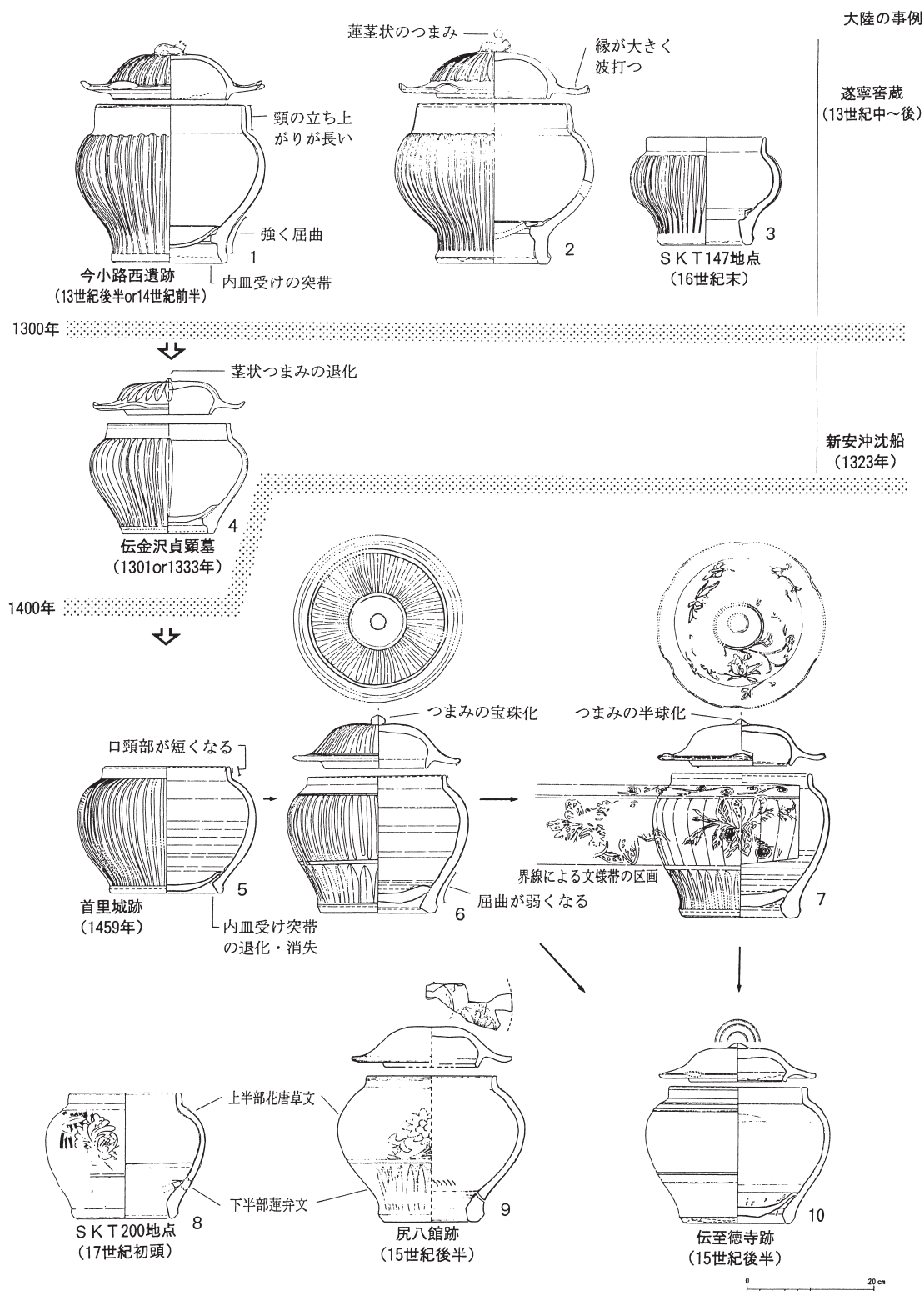
・遺跡名欄の※は、筆者は実見しておらず、報告書からの判断による。

・酒海壺欄の h は牡丹文などのへら文様、m は無文、s は縞文を表す。

・庭園欄の■は発掘の結果、庭園がなかった遺跡、○は庭園が確認された遺跡を示す。

世紀もしくは先述した龍泉窯系青磁の生産終了以後半世紀を経ていると考えられる十六世紀後半の遺跡からの出土を一応伝世品と仮定すると、それは第5表の四十三遺跡中十一遺跡の二十六パーセントが保有しているにすぎないことになる。すなわちその他の遺跡は、通常のサイクルで使用・廃棄されたと考えられよう。もちろん高級品であることから、食膳具に比べて搬入から廃棄に至るスパンは長くなるであらうが、それらは伝世とはいいたい通有の保有期間といえるものであろう。⁽²⁶⁾

次いで、青白磁梅瓶である。⁽²⁷⁾内野正氏の集成によれば、最も多く出土するのが鎌倉で、搬入の盛期は十三世紀後半～十四世紀前半とされる（内野一九九二）。また、それ以降の出土品については、「鎌倉以来の名家であることの証として、青白磁梅瓶が伝世されていた可能性」を考えられている（九十八頁）。鎌倉を除いた内野氏集成の一覧表の八十六遺跡中、多く見積っても二十数遺跡二十五パーセント程度が十五世紀以降の遺構に伴って出土した可能性がある遺跡といえよう。合わせて、内野氏の集成と同時期の資料集成である『日本出土の貿易陶磁（東日本編）』二冊（国立歴史民俗博物館編一九九四）から青白磁梅瓶を抽出すると、二二四一遺跡中六パーセント弱の二一九遺跡からの出土があり、内八十一が鎌倉遺跡群からの出土であることから、それを除くと四十六遺跡二パーセントとなる。さらに、その中で十五世紀以降の出土例は、可能性を含めて十四例となる。⁽²⁹⁾したがって正



第8図 青磁酒海壺の形態変化
(鶴巻 2001 より転載)

確には、個々の事例に当たらないとわからないが、鎌倉を除いた出土遺跡例の数が伝世の可能性をもつということとなる。

時期的には、口縁部が外へ鋭角に挽きだされるタイプが十二世紀以前、日本で最も一般的な口縁下がふくらむ蛭口の口縁が十三世紀代、外反口縁が新安沈船例から十四世紀となる³⁰⁾（大阪市立東洋陶磁美術館編一九九四）。

そして青白磁梅瓶や白磁四耳壺・水注等は、小野正敏氏が鎌倉を源泉とする価値観に基づくとされる室町殿の「君台観左右帳記」（小野二〇〇三）に見出すことができない。この事実も、もはや中国では生産されていないために求めようがない器物であったことを意味し、したがって当時の価値体系に位置付けられることがなかったといえるのではなからうか。また当然ながら、当時の日本の支配階層の人々が古物と考えていたこと、実際に古物かどうかということは別の問題であり、尚古の気風が実際以上の年代観を与えることは現代でもよくみられることである。

なお、最後に加えると、戦国期の上層階層の人々が求めたものは、あくまでも堆朱盆や食籠といった唐物漆器であり、胡銅とよばれた金属製唐物であった（水澤二〇〇九^a）。陶磁器奢侈品は、それらの代替品であり、補充するものであったが、一ランク下の器物とせざるをえない。それはおそらく鎌倉から室町の武家においても同様で、彼らの価値体系に禪宗が持ち込んだ影響は非常に大きいものがあるといえよう（橋本二〇二）。

おわりに

以上、貿易陶磁器食膳具を中心に十五世紀中葉～十六世紀中葉の様相をみてきた。その結果、十五世紀代は青磁が圧倒的比率を占めており、十五世紀中葉の青花磁の出現期から十六世紀第1四半期までの定着期は、一部の高級品が政治的最上位階層に保有されたものの、貿易陶磁器

の主流となるほどの流入量には達せず、社会にその存在を認知させる段階に留まっていたと考えられる。

そして青花磁が量的に広く日本社会に浸透するには十六世紀中葉をまたねばならず、しかしながらその時期は白磁皿がより多くを占めることから、青花磁が出土品の中で主体を占める時期は一五七〇年代の天正年間以降にずれ込むことを明らかにできた。

また碗皿では、十六世紀以降白磁・青花磁皿が圧倒的であり、碗は青磁から青花磁へと移るが、主体的には漆器碗が用いられていたと考えられる。

今回は、蓄積の少ない戦国期武家の日常使いの貿易陶磁の実像を追ってきた。本稿が戦国期陶磁器研究の一助となれば幸いである。

なお、遺物の見学等にあたっては、下記の方々よりご高配をたまわった。記して謝意を呈する（敬称略）。

富山正明・南洋一郎（諏訪問興行寺遺跡）、中村 敦・小森俊寛・馬瀬智光・柴田圭子（山科本願寺跡）、西尾克己・舟木 聡（新宮谷遺跡・富田川河床遺跡）、續伸一郎（堺環濠都市遺跡）、岡田章一（宮内堀脇遺跡）、大庭康時・佐藤一郎・田上勇一郎（博多遺跡群）

註

（1）ただし、十六世紀第4四半期の安土城以降の編年が無効になったわけではなく、その変遷はおそらく理論的には正しいのであろう。ただ、戦豊期以前の城郭についても先進的な技術が用いられており、そこに戦豊権力が勢力範囲の拡大とともに他地域の築城技術を学んで自領の城郭に活かしていたということであろう。なおそのことについては、すでに千田氏自身の指摘がある（千田二〇〇〇、II-3「戦豊系城郭の成立」註10）。また、個々のパーツが戦豊期以前に遡ることについては、中井均氏の論考を参照のこと（中井二〇〇九）。

（2）前稿で取り上げた遺跡は、越前一乗谷朝倉氏遺跡、越後御館の乱の鯉ヶ尾城跡、瀬戸内芸予諸島の見近島城跡である。なお、現在のところ西国においては、該期

の瀬戸・美濃製品の流通量が少ないため、より普遍的な貿易陶磁器をもって年代基準としたいというのが本稿のねらいであるが、西国の瀬戸・美濃については、以下の藤澤良祐氏のまとめがある。「富田川河床・湯築城・勝瑞館では、大窯Ⅰ段階（湯築城・勝瑞館は後Ⅳ期新段階から）に出土量が急増し、（中略）これらの遺跡では、第3段階前半にかけて大窯製品の出土量は減少する。これも東国的といえるが、衰退・廃絶する湯築城・勝瑞館を除くと第3段階後半から第4段階にかけて出土量が再び増加する」（藤澤二〇一〇、二十七頁）。

(3) 個々のトレンチの面積は、一部を除いて見出せなかったが、主郭全体図から土塁部分を除いた面積を算出した。

(4) 報告書「喜多方市教委二〇〇八」には、一点のみ青磁甕描蓮弁紋碗（B2）の体部片（22）が報告されているが、残りの青磁碗はすべて端反碗である。なお、青磁端反碗と報告されているが、白磁ビロースクタイプⅢ類の端反碗（23）が認められる。

(5) 報告書図版16の青磁端反碗（42）は、火中したためか釉がくすんでいるが、詳細に観察すると体部下半に線描状の蓮弁が認められる。また内底輪刺でもあり、このような意匠は珍しい。なお同図版の35は、甕描蓮弁紋碗のように図化されているが、細鎬蓮弁紋碗であり、同38はⅢ類の無紋碗である。

(6) このように考えてきた場合、よりモノの入りが少ない会津新宮城跡で出土している青磁鎬蓮弁紋碗についても、そのような可能性を検討する必要がある。

(7) このことは、さらに一八頁でも繰り返しの記述がみられる。しかしながら同一報告者による「第Ⅳ章 遺物」の「3 第Ⅲ期炭化物層および第Ⅲ期の概要」では、「建物跡に残る炭化物堆積面と火事場整理により形成された炭化物堆積層から出土した遺物は、その多くが後者からの出土である。現位置を水平方向に人為的に移動させられているものの、接合関係などから建物跡に伴う一つの遺物群として捉えることができる」（六十八頁）と記述しており、「第Ⅴ章 まとめ」の整合性を欠く。

(8) 報告書「まとめ」には、「第Ⅳ期の造成は最大に広がり、敷地面積は過去最大となる一方で、遺構は極めて少なく（中略）構造物は東に集中し、規模も小さい」（二一四頁）とある。また遺構の説明でも「上層の二時期（筆者註：第Ⅲ・Ⅳ期）が大規模な造成を伴う「興行寺」関連のものである」（七頁）とある。ただし第Ⅲ期の火災後の興行寺の復興は、遺物分布状況からみて西側に集中していたと考えられるため、火災後の復旧とⅣ期の造成は、別時期であった可能性が高いものと思われる。

(9) 富山氏は「西光寺・興行寺系図」に「大谷住」の記載が一四四三年～十六世紀初頭までみられるとする（報告書一八八頁）が、筆者は「玄真」が康正元年（一四五五）に寂したのを嚆矢として、「妙秀」が長享二年（一四八八）「日野一

流系図中の大谷一流諸家系図四（興行寺系図）」もしくは同三年（一四八九）「別格諸寺系図中の西光寺・興行寺系図」に卒した以降の記載をみつけることができなかった。その他は、後述する「祐存」が文明七年（一四七五）に卒し、明応元年（一四九二）に荒川で卒した「祐慶」が始め大谷に住したという。以上、四名に「大谷」が記されている。なお、開基の「玄真」は、「興行寺文書」（越前・若狭一九八〇）によれば、大谷に応永十三年（一四〇六）に入るも応永十八年（一四一一）には荒川に道場を建てたとある。したがって「玄真」は、康正元年（一四五五）の臨終に先立ち由緒の地「大谷」に戻って「籠居」（＝隠居）したものと考えておきたい。そして、荒川で興行寺を伝えた「祐慶」（蓮実）を除き、一番遅くまで大谷に住した「妙秀」は、右の「興行寺文書」によれば「貳男妙宗」と出てくるが、「流浪の身とな」と記され、系図にも「元時衆」「遁世」との注記がなされている。このことから、「祐存」が文明七年に討たれて興行寺が炎上した後、「妙秀」が大谷に戻って庵を結んで十数年住したと考え、興行寺Ⅲ期の火災面後の居住者にあてておきたい。

なお、報告書一八八頁「興行寺」については、「華藏院」及び家系図の年代を一世紀誤記していることを付言しておく。

(10) ちなみにⅡ期は十五世紀後半～十六世紀中頃とされ、図十六ではⅠ期とⅡ期の間の破線の下に応仁の乱一四六七七年を記す。

(11) 各遺物群の田中氏による時期比定は、図1（HK T四二SD七三五）十四世紀後半～十五世紀前半頃、図2（HK T九四SD一〇二）十四世紀後半～十五世紀前半頃、図3（HK T二二SD七四二）十四世紀後半～十五世紀前半頃、図4（HK T一一SD一五六）十五世紀前半～中頃、図5（HK T一R一SE一〇七・SK九三）十五世紀前半～中頃、図6（HK T一R一E一〇八区I面下）十五世紀前半～中頃である。なお、図7図以降は、十六世紀以降の遺物とされており、そうすると自身の言にある「十五世紀後半になるとどこからも出土するようになる」（大庭二〇一一）という時期の遺物は博多では提示されていないことになる。

(12) 吉岡康暢氏は、青磁雷紋帯碗の出現時期を一四二〇年前後としており、その根拠として、筆者が存続年代の上限を廃棄時期に求めている、中国の碗皿類は搬入から廃棄までに常識的に二十年程度の耐久期間が想定されるためとした（吉岡二〇一一）。しかし一般的に二十年ほどの耐久性を有しているとしても、運搬時に壊れる場合や搬入後間をおかず壊れる場合もあろう。したがって筆者は、青磁雷紋帯碗について廃棄時にみる初現である一四四〇年頃をもって出現年代と考える。そして使用のピークは、首里城京の内や諏訪間興行寺第Ⅲ期例から十五世紀第3四半期とみる。吉岡氏が想定されるように一四二〇年頃を初現とすると、その後三十～五十年を経てようやく出土のピークを迎えるという現象は、上の

耐久性からみても不自然ではなからうか。

なお吉岡氏は、十三湊遺跡群で青磁雷紋帶碗等が出土しない理由として、安藤氏と南部氏との抗争が激化した一四二〇年代以降港湾へ寄航する廻船が減少したためとする（吉岡二〇一、一五四頁）。しかし一四三二年の火事場整理遺構を含め一片の出土もないことは、説明がつかないものと考ええる。

- (13) 〔西尾ほか二〇一二〕一六頁所載の表2「新宮谷館跡出土貿易陶磁器一覽（破片数）」では、先の二四六九点の内、青磁一八五五点（青磁全体の四十三パーセント）、白磁七二二点（白磁全体の五十パーセント）、青花一七八点（青花全体の二十九パーセント）の合計一〇七五点四十四パーセントほどが分類報告されている。青花の調査割合が低い、こと皿に関しては一六三片中六十六点の四十一パーセントであり、他と同程度の調査率となる。

- (14) 南方の九十六・九十七年調査区から漆刷毛や篋、漆漉布が出土していることから漆工人の存在が認められるが、漆器の多くは完成品で北方の九十五年調査区からの出土であることから、これらは実際に使用されたものである。なお岡田氏は、非日常の土器と漆器碗がセットで用いられたとされる（報告書一七五頁）が、そのような出土状況は認めたいように思われることや全国的に十六世紀代の日常使いの碗には漆器が大きなウェイトを占める（水澤二〇〇九b）と考えられることから従えない。

- (15) これらの各器種についても、青花磁外反皿↓（白磁全面施釉内湾皿）↓青磁線細連弁紋碗（B4）↓（青磁腰折皿）↓白磁外反皿↓青磁稜花皿の順で出現すると考えている（水澤二〇〇九b二九頁表1）。

- (16) 実見させていただいた結果、青磁二四八点、白磁二一五五点、青花磁四六〇点をカウントしたが、特に青磁と青花磁は報告書の点数よりかなり少なく、誤差の範囲では片付け難いように思われた。そのような中、二〇一〇年に柴田圭子氏より調査時の画像データを送っていただき、それをもとに再カウントしたところ、青磁七十点、青花磁四十点ほどを追加することができた。これで報告書数値の九十三パーセントに達し、概ねの傾向を示せたのではないかと考える。柴田氏のご厚情に高配に感謝する。

- (17) 他に五彩製品三個体や建盞を含む舶載天目茶碗の存在も注目されるが、出土品として陶磁器以上に重要な遺物として蒔絵や堆黒の存在があげられる。堆黒等の漆器製品は、金属瓶（胡銅）類とともに支配階級の必需品として中国で真っ先に買い求められ、將軍―守護間等の贈答品として用いられた財物であり（水澤二〇〇九a）、その実物が破片とはいえ出土したことの意義は非常に大きい。

- (18) また柴田氏は、市村高男氏の論（市村二〇〇四）を引きつつ芸予諸島の出土遺物から九州と畿内を結ぶ結節点という位置付けを否定され、中世後期の瀬戸内海の流通を備前以西と以東で二分された（柴田二〇一一）。中世後期といっても

一括りできないことがわかり、地域ごとの検証が必要である。

- (19) 白磁・三彩の大▲大■の多量が何点を意味するのか不明であるが、ここでは一応五点として計算した。また、発掘調査の常として位置が特定できない遺物の存在も想定されるが、大勢に影響がないものとして、ここではおく。

- (20) 藤澤良祐氏は、二〇〇八年の著書の補註において、明応七年（一四九八）の地震で壊滅したとされる安濃津遺跡出土品をもって大窯成立期とし、これまでの一四八〇年代という年代観を下らせている（五四〇頁）。

- (21) 遺跡概要は「勝間田城跡」（菊川シンボ二〇〇五、一四七―一四九頁）に、貿易陶磁器内訳については「貿易陶磁分類表―遠江」（菊川シンボ二〇〇五、四〇〇頁）に拠ったが、白磁皿の数値が一段ずれていると考えられるため、補正して計上した。

- (22) 白磁内湾皿及び八角坏等のD群は十五世紀前半から出現しているので、半分とした。

- (23) これらの遺跡では、大型の青磁瓶類・香炉・盤等が保有されているため、碗皿に占める青花磁の比率はさらに高まる。

- (24) ただし、発掘調査が城下に限定されていることから、十六世紀第2四半期以降山城部分に主居住空間を移した可能性も考えられよう。

- (25) 青磁盤は、威信材とするには多数みられることから、現知見では径八寸以下の製品を通常の碗皿に準ずる食膳具とし、それ以上の径のものをランク分けするべきであると考えている。また、青磁香炉についても、最も需用が多い径三寸前後の筒形タイプとそれ以外の香炉を別々に扱う必要があるが、本器種分析は盤と用途が異なるため別個に考えなければならない問題である。

- (26) 湯築城跡の奢侈品について検討を行った柴田圭子氏は、一三一一個体中、六割以上を青磁が占めることを指摘され、例えば最も点数の多い香炉では三十四点中二十六点、それに次ぐ盤では二十六点中二十四点が明以降（十四世紀後半以降）の所産であることを明らかにされている（柴田二〇〇五）。したがって当然のことながら、古いものは少なく、比較的新しいものが多いことがわかる。

- (27) なお、青白磁梅瓶よりも概ね古い白磁四耳壺についての伝世例は、非常に限られているように思われる。例えば、筆者の乏しい知見からでも小野氏一覽表中の浪岡城跡、小田島城跡、至徳寺遺跡、河越館跡、小田城跡、飛山城跡、湯築城跡等は、より古い時期の遺構に伴う可能性を考えるべき事例が多いのではないかとと思われる。

- (28) 資料集は、報告書ごとに掲載されていることから遺跡総数は、やや減る。

- (29) 資料集と内野氏集成の第1表から伝世の可能性があるとと思われる出土例を拾うと、以下の三十一例をあげられる。根城跡（青森県）、笹間館跡、岩谷堂城跡（以上岩手県）、今泉城跡（宮城県）、泉城跡、東館跡、三春城跡（以上福島県）、屋

代B遺跡（茨城県）、田端遺跡（群馬県）、忍城跡、加納城跡（以上埼玉県）、小金城跡、一宮城之内（以上千葉県）、勝沼城跡、八王子城跡（以上東京都）、江上館跡、小木ノ城跡（以上新潟県）、蓮花寺遺跡（富山県）、普正寺遺跡（石川県）、一乗谷朝倉氏遺跡、豊原寺跡（以上福井県）、大井城跡（長野県）、満願寺跡遺跡（静岡県）、江馬氏館跡、東氏館跡（岐阜県）、新庄城遺跡（滋賀県）、河津館跡、有岡城跡（以上兵庫県）、根来寺坊院跡（和歌山県）、尾高城跡（鳥取県）、浜の館（熊本県）。

（30）内野氏は、紋様を基準にA・B類に分類されている（内野一九九二）が、AとB―1類は器形が同じであることから同時期の精品と普及品ととらえられ、B―2類は外反口縁であることから時期が下るものと考えたい。

引用参考文献

- 市村高男 二〇〇四 「中世西日本における流通と海運」『中世西日本の流通と交通』高志書院
- 井上哲郎 二〇〇五 「南関東における城館跡出土陶磁器―その傾向と歴史的背景―」『城郭と中世の東国』高志書院
- 井上哲郎 二〇一一 「房総における城館跡出土の貿易陶磁―国産陶器との共伴関係を中心に―」『貿易陶磁研究』第三十一号
- 内野 正 一九九二 「青白磁梅瓶小考」『研究論集』XI、東京都埋文センター
- 越前・若狭一向一揆関係文書資料調査団編 一九八〇 『越前・若狭一向一揆関係資料集成』同朋舎出版
- 大阪市立東洋陶磁美術館編 一九九四 『宋代の青白磁』中国陶磁シリーズ8
- 大阪市立東洋陶磁美術館編 二〇一一 『明代龍泉窯青磁―大窯楓洞岩窯址発掘成果展』
- 大庭康時 二〇一一 「博多研究会二〇周年記念シンポジウム討論の概要」『博多研究会誌』二〇周年記念特別号
- 岡田章一 二〇〇九 「出土土器・陶磁器の検討」『宮内堀協遺跡Ⅰ』兵庫県教委
- 岡田章一 二〇一一 「但馬国守護山名氏の本拠と土器―宮内堀協遺跡の調査から―」『考古学と室町・戦国期の流通』高志書院
- 小野正敏 二〇〇三 「威信材としての貿易陶磁と場―戦国期東国を例に―」『戦国時代の考古学』高志書院
- 小野正敏 二〇〇六 「戦国期の都市消費を支えた陶器生産地の対応」『国立歴史民俗博物館研究報告』第二二七集
- 柏田有香 二〇〇六 「建物について」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成一七年度山科本願寺跡（4）』京都市文化市民局

亀井明德編 二〇〇二 『明代前半期陶磁器の研究―首里城京の内SK01出土品―』専修大学アジア考古学研究報告書1

菊川シンポジウム実行委員会 二〇〇五 『陶磁器から見る静岡県の中世社会 資料編』

木更津市教委 一九八四 「真里谷城跡発掘調査報告書」

喜多方市教委 二〇〇八 「会津新宮城跡発掘調査報告書」市文調報告書第五集

京都市文化市民局 二〇〇六 「山科本願寺跡（4）」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成十七年度』

国立歴史民俗博物館編 一九九四 『日本出土の貿易陶磁（東日本編1）』『同（東日本編2）』歴史民俗資料調査報告書5

湖北町教委 一九八八 『史跡 小谷城跡』

埼玉県立歴史資料館編 二〇〇五 『戦国の城』高志書院

佐藤一郎 二〇一一 「博多―瀬戸内と東シナ海をつなぐ―」『考古学と室町・戦国期の流通』高志書院

山陰中世土器検討会 二〇〇九 「山陰における中世後期の貿易陶磁」第八回資料集

市浦村教委 二〇〇〇 『十三湊遺跡第八六次発掘調査報告書』村埋文報告第十一集

市浦村教委 二〇〇三 『十三湊遺跡第一四五次発掘調査報告書』村埋文報告書第十五集

史跡を活用した体験と学習の拠点形成事業実行委員会編 二〇〇五 『検証 比企の城』シンポジウム埼玉の戦国時代資料集

柴田圭子 二〇〇一 「十六世紀中葉の輸入陶磁器の再評価―中国・四国地方の遺跡を中心に―」『中世土器研究論集』

柴田圭子 二〇〇四 「中部瀬戸内の流通と交通」『中世西日本の流通と交通』高志書院

柴田圭子 二〇〇五 「湯築城跡出土の輸入陶磁器奢侈品に関する考察」『森宏之君追悼城郭論集』織豊期城郭研究会

柴田圭子 二〇〇七 「湯築城における段階変遷と年代観再考」『河野氏と湯築城をとりまく諸問題』伊予の遺跡と中世史研究会第一回シンポジウム資料

柴田圭子 二〇一一 「瀬戸内海島嶼部の様相―芸予諸島の出土資料から―」『考古学と室町・戦国期の流通』高志書院

島根県教委 一九八三 『史跡富田城関連遺跡群発掘調査報告書』

水藤 真 一九七五 「一乗谷の石塔・石仏」『一乗谷石造物調査報告書Ⅰ』福井県教委

千田嘉博 二〇〇〇 『職豊系城郭の形成』東京大学出版会

田中克子 二〇一一 「博多遺跡群出土の中国陶磁器と対外貿易」『博多研究会誌』二〇周年記念特別号

- 中世を歩く会編 二〇一〇 『城館の年代観』 シンポジウム資料集 埼玉
- 續伸一郎 二〇一一 『堺環濠都市遺跡から出土した中国製陶磁器の様相について(素案)』『博多研究会誌』二十周年記念特別号
- 鶴巻康志 二〇〇一 『伝至徳寺跡の青磁酒会壺とその系譜について』『上越市史研究』6
- 帝京大学山梨文化財研究所編 二〇〇八 『戦国の城と年代観―縄張研究と考古学の方法論』シンポジウム資料集
- 東員町教委 一九八四 『山田城跡発掘調査』町埋文調査報告二
- 富山正明 二〇〇八 『遺物』「まとめ」『諏訪問興(行)寺遺跡』県埋文調査報告第二十分集
- 中井 均 二〇〇九 『検出遺構よりみた城郭構造の年代観』『戦国時代の城』高志書院
- 中森 祥 二〇〇九 『鳥取県における中世後期貿易陶磁の様相』『山陰における中世後期の貿易陶磁』第八回山陰中世土器検討会資料集
- 新潟県教委 二〇〇一 『堀越館跡』県埋文調査報告書第九九集
- 西尾克己・舟木 聡・守岡正司 二〇一一 『安米市新宮堂館跡出土の陶磁器』『古代文化研究』第二十号
- 西ヶ谷恭弘 二〇〇四 『只見町の中世』『只見町史第一巻通史編一』
- 西川幸治 一九九七 『蓮如の町づくり―寺内町と城下町の比較考察』『講座蓮如』第四巻、平凡社
- 柵津宗伸 二〇〇三 『大鑑清規と五山文学における喫茶の諸形態―中世信濃からの視角』『長野県立歴史館研究紀要』第九号
- 柵津宗伸 二〇〇四 『中世信濃の喫茶―開善寺文書、守矢文書、定勝寺文書、湯瓶および瓦質風炉による考察』『長野県立歴史館研究紀要』第十号
- 博通ほか編 二〇〇三 『史蹟建長寺境内』
- 橋本 雄 二〇一一 『中華幻想―唐物と外交の室町時代史』勉誠出版
- 兵庫県教委 二〇〇九 『宮内堀脇遺跡Ⅰ』県文化財調査報告第三六五冊
- 兵庫県立考古博物館 二〇一〇 『戦国時代の守護山名氏の城と戦い』特別展図録
- 平松令三編 一九七五 『西光寺・興行寺系図』『真宗史料集成第七巻伝記・系図』同朋舎
- 広瀬町教委 一九八二 『新宮谷遺跡発掘調査報告書』
- 福井県埋文 二〇〇八 『諏訪問興(行)寺遺跡』県埋文調査報告第二〇集
- 福岡市教委 二〇〇四 『博多八七―博多遺跡群第一二四回調査の報告』
- 藤澤良祐 二〇〇八 『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 藤澤良祐 二〇一〇 『西国出土の瀬戸・美濃陶器』『山陰地方における瀬戸・美濃陶器』第九回山陰中世土器検討会資料集
- 藤澤良祐ほか 二〇〇七 『愛知県史 別編窯業2 中世・近世 瀬戸系』
- 松原信之 一九九六 『越前朝倉一族』新人物往来社
- 松原信之 二〇〇四 『朝倉孝景の越前平定』『福井県史 通史編二 中世』
- 松原隆治 一九八六 『香掛城跡出土の「天文十七」年(一五四八)銘木簡と伴出遺物』『貿易陶磁研究』6
- 水澤幸一 二〇〇四 『十五世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相』『貿易陶磁研究』二四、後、水澤二〇〇九b所収
- 水澤幸一 二〇〇九a 『十五世紀末―十六世紀中葉の陶磁器様相―貿易陶磁と越前』
- 『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会、後水澤二〇〇九b所収
- 水澤幸一 二〇〇九b 『日本海流通の考古学―中世武士団の消費生活』高志書院
- 峰岸純夫・萩原三雄編 二〇〇九 『戦国時代の城―遺跡の年代を考える』高志書院
- 村上 勇 一九八七 『島根県富田城関連遺跡群出土の陶磁』『貿易陶磁研究』第七号
- 森 達也 二〇〇九 『十五世紀後半―十七世紀の中国貿易陶磁―沈船と窯址発見の新資料を中心に』『関西近世考古学研究』十七
- 二〇〇七 『真里谷城跡出土遺物の歴史的的位置―天文六年「新地」の城との関係を中心に―』『中世東国の政治構造 中世東国論上』岩田書院
- 山中雄志 二〇〇七 『新宮熊野神社と新宮城跡』『中世会津の風景』高志書院
- 山中雄志 二〇一〇 『会津新宮城跡と出土陶磁器』『貿易陶磁研究』第三十号
- 吉岡康暢 二〇一一 『第Ⅱ部第一章 十四―十五世紀中国陶磁の組成と編年』吉岡康暢・門上秀叔『琉球出土陶磁社会史研究』真陽社
- 嵐山町教委 二〇〇五 『埼玉県指定史跡杉山城跡第一・二回発掘調査報告書』町埋文調査報告八
- 嵐山町教委 二〇〇八 『杉山城跡第三―五次発掘調査報告書』町埋文調査報告九
- 歴史資料館展示・史跡整備担当編 二〇〇五 『シンポジウム「検証 比企の城」討論』『研究紀要』第二十七号、埼玉県立歴史資料館
- 【二〇二二年四月提出】
- (胎内市教育委員会、国立歴史民俗博物館共同研究協力者)
- (二〇一三年一月二五日受付、二〇一三年五月二四日審査終了)

A Realistic Portrait Concerning the Daily Use of Trade Ceramics by Samurai Families in the Warring States Period with a Focus on the Mid-15th to Mid-16th Centuries

MIZUSAWA Kouichi

As an archaeological means to explore the different time periods of tower houses during the Warring States period, this study examined aspects of the archaeological finds of the mid-15th to mid-16th centuries with a focus on dining tableware that had the shortest life cycle among trade ceramics, and clarified the composition for each archaeological site.

Firstly three sites dated to the end of the early 15th century were studied, and it was confirmed that the types of ware were very limited, followed by studies of the Suwama Kogyoji Temple site in Fukui Prefecture, which is a standard reference material of the 3rd quarter of the 15th century. Then, to indicate the transition of trade ceramics in the relevant period, 12 sites were examined, including Miyauchi Horiwaki in Hyogo Prefecture, Rinsenji Temple and Yamashina Honganji Temple in Kyoto Prefecture, Mariyatsu Castle in Chiba Prefecture, Shitokuji Temple in Niigata Prefecture, in addition to Michikajima Castle in Ehime Prefecture, and Ichijodani Asakura Clan Ruins in Fukui Prefecture, both of which were discussed in the previous paper.

As a result, it was found during the 15th century, celadon porcelain accounts for an overwhelming percentage of finds. In the settlement period, from the first appearance of blue and white porcelain in the mid-15th century to the 1st quarter of the 16th century, some quality ware were owned by the highest political class, and the inflow levels of this type of porcelain ware did not reach those of the mainstream of trade ceramics, but it can be considered that its existence was generally known throughout Japanese society.

It was not until the mid-1500s that increasing quantities of blue and white porcelain were found widely spread throughout Japanese society, but white porcelain dishes account for a higher percentage of finds; this clarified that the period in which blue and white porcelain accounts for the majority of such archaeological finds was extended to after the 1570s.

From the 16th century, the main type of ceramic ware overwhelmingly found, were white porcelain, and blue and white dishes; china bowls shifted from celadon to blue and white porcelain, but it can be considered that lacquered bowls were more commonly used.

Moreover, high-grade articles other than tableware were also examined, and the result shows that many articles had not been owned or passed on for generations as claimed, and it is assumed that

ware produced in China was introduced directly.

Key words: samurai family, trade ceramics, luxury items, Yamashina Honganji Temple, celadon porcelain, blue and white porcelain